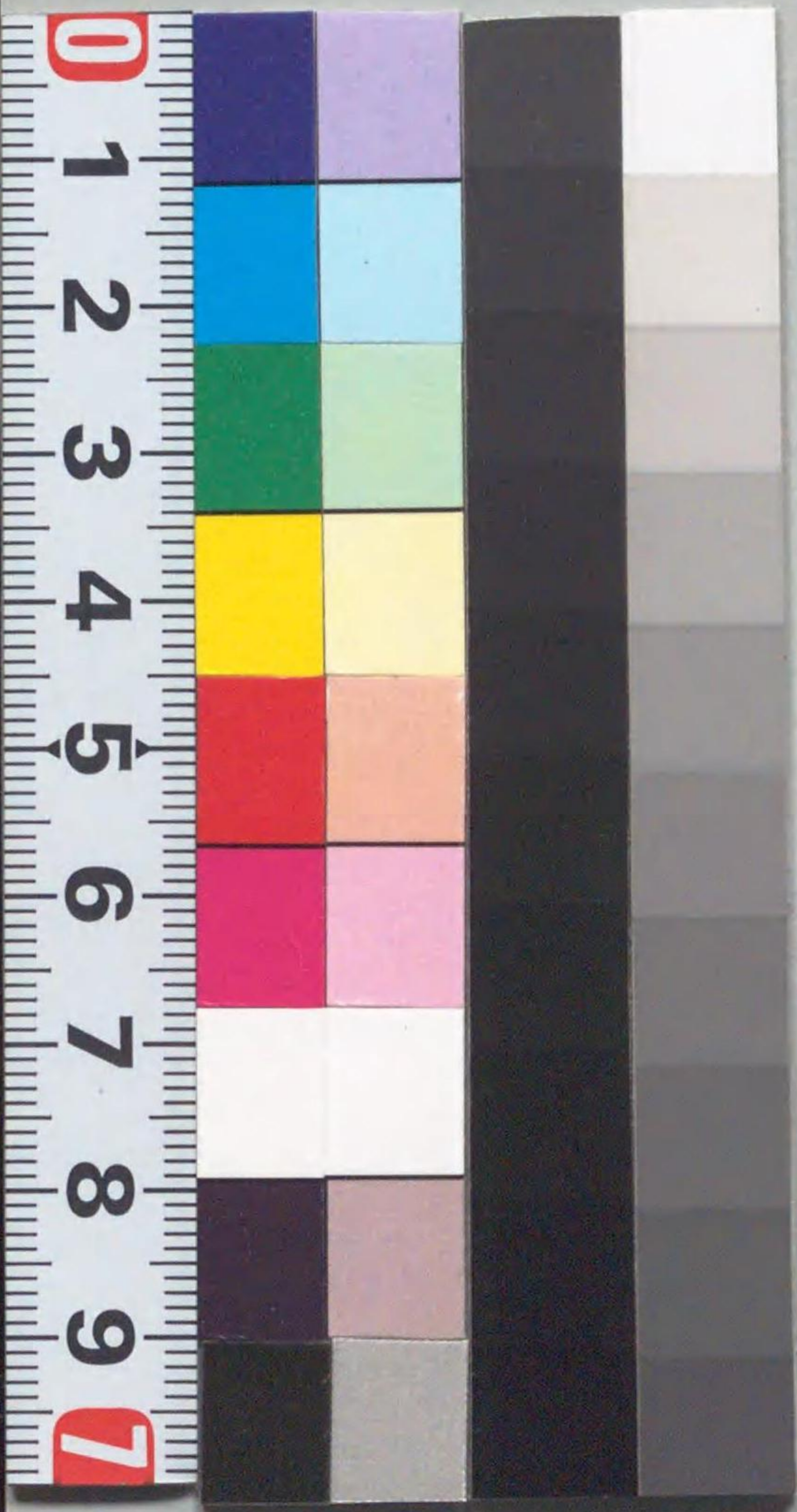


浪華人物誌卷三

281.63

Q469n





336152

浪華人物誌卷三

俳家

舟木又甫

浪華の人流派詳ならず貞享年間

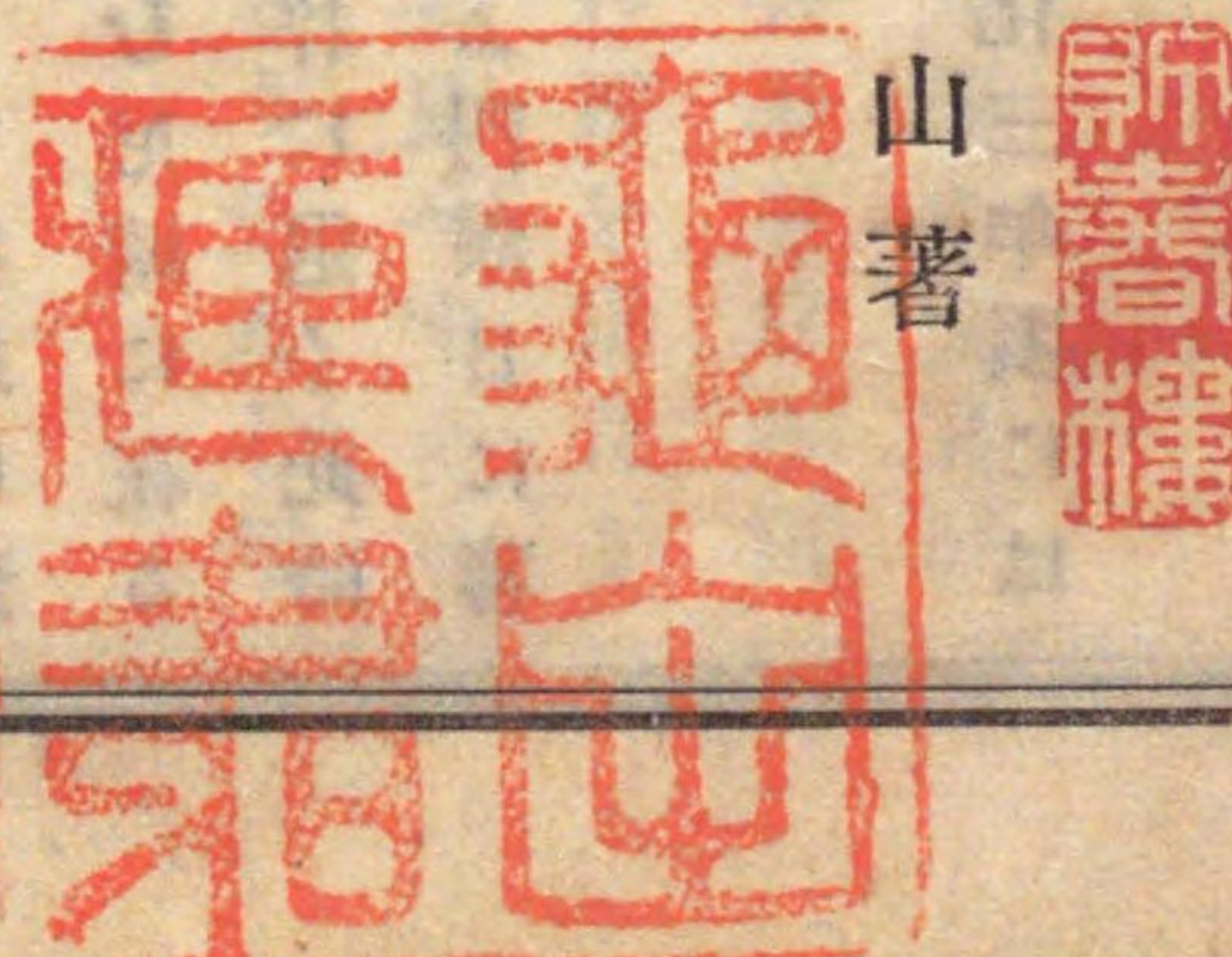
市川心齋

浪華の人流派詳ならず貞享年間

山中凡齋

道億又光漸と號す通稱鴻池屋善右衛門浪華の人珠光か遺風を慕ひ能古
實を究め古器を愛す茶人醉古集茶人系譜に千利休門人の如く見ゆれど
も同書花押譜に享保年中茶を近衛准三后家熙公に献すとあり利休が誅

岡本撫山著



せられし天正十九年より享保の初年まで百二十餘年を歴たり必ず一誤あるべし

大西閑齋

名は直堅法號宗順初め石州流の祖片桐石見守貞昌に仕ふ貞昌之に茶事を授け其奥秘を傳ふ貞昌卒するに及び致仕を乞ふ嗣子聽さず後遂に致仕家居すること數年尼崎城主青山氏召して茶事を司らしむ尼崎に在ること二十餘年青山氏封を信州に徙すに及び骸骨を乞て桑梓に退く此時閑齋の名世上に聞ゆ浪華の人狹間氏禮を篤くして之を邀ふ門派日に蕃し享保二年丁酉七月七日没年七十三辭世の句あり曰

晴而行久心與俱仁秋乃月

八丁目寺町妙中寺に葬る紫野大徳寺巨妙子碑文を撰す文化三年頃には荆榛中に碑石ありしとのことなれども今は見えす

大口樵翁 男如翁

名は保高字は樵翁恕軒又養浩齋合翠子と號し大玄と稱す天王寺夕日が岡の傍に住す大西閑齋に従ひ茶法を學ひ世に名あり兼て香事を好み曰井氏に従ひ西三條家の流を極め又雲門老人を見て參禪し妙旨を得たり明和元年甲申十二月六日没年七十六閑齋と同所に葬る今墓見へす如翁名は保教芳流庵と號す樵翁の男なり業を嗣で時に名あり安永七年戊戌閏七月十八日没父と同所に葬る今墓見へす

藤村正員 同芳隆 同正齋

正員又正隱に作る蘭室松杉堂風外庵等の號あり庸軒の二男或云弟なりと茶道を庸軒に受けて世に聞ゆ大阪に住す享保十八年癸丑七月十七日没年八十四墓は相坂一心寺にあり芳隆顯翁と號す正員の男業を嗣ぐ元文元年丙辰五月十一日没年六十五

墓は右に同じ

正齋東堂と號す芳隆の男寶曆五年乙亥二月七日没年七十二子なし庸軒の正派こゝに至て絶ゆ墓は右に同じ

明福寺觀山 弟廉齋 小山庸山

名は元隆觀山又漸至庵觀解脫庵慕庸軒と號す東本願寺末大阪明福寺の住持なり茶儀を藤村正齋に學び盡く其奥秘を極む正齋没して嗣子なく庸軒の正派傳へて此人に在り其名四方に聞ゆ後浪華東小橋村に卜居して寥々庵と呼べり天明五年乙巳十二月廿五日没年七十墓は茶臼山邦福寺にあり

廉齋名は韜玉觀山の末弟也觀山に嗣で明福寺の住持たり故ありて籍を削られ隱居して廉齋と稱し只寧即心庵と號す茶儀を兄觀山に學ぶ庸山桂樹庵と號す觀山の高足弟子にして庸軒の流派を傳ふ

齋藤道節

浪華の人義翁又如竹齋有儘庵と號す茶法を藤村庸軒正員及土肥二三等に學ぶ晩年江戸に徙住し明和年間八十餘にて没す

多田宗掬 男宗掬

播州姫路の人大阪に住す物々齋餘月庵の號有り如心齋宗左の門人風流一時に冠たり多田氏の初代寶曆八年戊寅五月九日没年六十九天滿東寺町長徳寺に葬る

二代目宗掬十友齋と號す業を嗣ぐ寛政七年乙卯十一月廿三日没初代同所に葬る

青木宗鳳

大阪に住す遠州流山田大有の門人也紫雪庵又水蒲一統子の號あり薙髮の後凡鳥と稱す明和二年乙酉十二月七日没す年七十六下寺町宗念寺に

葬る青木初代也

二代宗鳳凡鳥の男初名宗舒温故齋又新柳軒と號す寛政五年癸丑七月十九日没年六十四同所に葬る

上野宗吟

原叟宗佐門人浪華の人

住山揚甫

如心齋宗左門人浪華の人

林 呐 庵

文化元年甲子八月廿六日没年六十八八丁目寺町妙中寺に葬る

本莊宗敬

名は正路松濤庵と號す浪華の人石州流茶法を河野宗鴻に受く文化二年没す

柏木宗右

文政二年巳卯七月六日没年八十六積崑亭と號す西成郡野田邨極樂寺に葬る

狩野宗朴

大阪に住す一燈宗室門人千家裏流

木津宗全

大阪に住す武者小路流派啜齋宗守門人

稻垣休叟

大阪の人竹浪庵黙々齋松竹主人等の號あり初代多田宗菊門人文政二年巳卯七月廿三日没年五十墓は小橋寺町大應寺にあり

花月庵鶴翁

姓は田中名は元長菊井館と號す清水町に住し釀酒を業とす宅中井あり

舊名を浪華清水と云ふ後呼て菊之清水と云此水を以て酒を釀し其銘を菊之井と云ふ夙に賣茶翁の風を慕ひ煎茶を好み別に茶の一家を爲し世上に弘む和漢の書畫古器物を愛翫し殊に茶器を愛するの餘り茶白山の南邦福寺内に急須塚を設け普く世の同感の士をして急須の破れたるを納めしむ黄蘗聞中禪師の門に入て禪を學び毛孔と號す又香川景樹に和歌を學びて名を賀壽と呼ぶ天保三年江戸に遊び平田篤胤大窪詩佛谷文晁等に交はり綾瀬川邊に茶筵を設け同好の諸名家と俱に樂めり同九年一條家の召に依て京師に至り階下に茶具を荷ふて式をなし貴顯諸卿に茶を薦めしに種々の被け物あり鶴翁の稱も此時與へらるゝ所なり嘗て清國西湖の水を得て陶工木米をして其壺を造らしめ之を藏封して澱川青灣に沈め永く浪華の人をして其流れを汲ましめんとす其時自詠の和歌

稀仁得天宇都世之西乃湖乃水越長柄仁汲也風流士

賀壽

嘉永元年戊申八月廿二日没年六十七墓は邦福寺にあり

俳諧

西山宗因

浪華天満の人也肥後加藤家に仕へて西山次郎豊一といふ初め連歌を里村昌琢に學びて山崎宗鑑荒木守武の風を慕ひ天性奇才ありて道に進むこと衆に超たり寛永中主家退轉するに及び心を俳諧によせ貞徳の流派を看破して別に一派を開く世に檀林風と稱す薙髮して宗因と改名宗師北野に幽棲し後浪華天満に住す梅翁又忘吾齋向榮庵一幽子の號あり松江維舟と交り深し或は維舟の門弟とするは誤れり延寶年中江戸に下る其頃田代松意正友の輩俳諧談林を唱へ初め宗因を迎へ江戸十百韻を興行して其派を弘む其卷頭に宗因「されば爰に談林の木あり梅の花時に奥州岩城平の城主内藤風虎露沾の二氏此門に入て上手の聞ありし故其流

336152

派ますく引まれりとかや或日市村竹之丞座芝居見に行たるに芭蕉居合せ初て宗因と對面す時しも門人何某の句に「子は勝りけり竹之丞」としての上の五文字を置かね宗因に乞ひけるにおやおやおやと冠すべしと教ける後に芭蕉此事を弟子に示して其奇才を稱歎せしとなり天和二年壬戌三月廿八日江戸の客舎に没す年七十三或云七十八墓は江戸日暮里養福寺にあり又大阪天満西寺町西福寺に碑あり實省宗因法師觀光昌察處士と刻せり子宗春といふ連歌を以て家を嗣ぎ大阪に住す享保六年辛丑に歿す墓は西福寺にあり宗因の句

白露や無分別なる置所

新春の御慶は古き言葉哉

世の中や蝶々とまれ斯もあれ

移り行く早いかのぼり紙幟

有明の油ぞ残る杜鵑

朝夕の人も珍し今朝の春

夏の夜や東はなしに西は雲

峯入は宮も草鞋の旅路かな

椎本才麿 芳室

字は少文浪華の人晩年舊徳翁と稱す初め山本西武の門に入りて則武といひ井原西鶴の弟子となりて西丸又西麿と改め西山宗因の教を受しよ
り才麿と更めたり或年江戸に赴きし時身の隱家に山を買けりといへる
附句したり時の俳宗沾洲ひそかに此を難せりと聞て思へらく沾洲は此
道の大家然るに買山の故事を知ざるは江戸の俳諧恐るゝに足らずと其
年の暮に又「富士は我買て置けり年の暮沾洲傳へ聞て「兎や角の年はづか
しや暮の富士」として其過を改めたりとかや元文三年戊午正月二日八十

三歳にて没す天王寺元三大師堂の西に碣あり

芳室甘泉庵と號す椎本二代なり延享四年丁卯三月四日没年八十四

才麿の句

思ひ出て物なつかしき柳かな

梅が香に更ゆく笛や御曹子

怠らず咲て登りし葵かな

冬木立いかめしや山の唯住居

前川由平

西山宗因の弟子なり晩年釋に入て自入と改む寶永年中浪華北野に没す
來山の師なり其作多くは傳はらずとぞ

蛤や三日の月吐今日の海

山姥が至らぬ山や雲の峰

小西來山

來山名詳ならず十萬堂湛々の號あり浪華の人(或は泉州堺の人とすれども來山句集正徳四年歲旦の句の端書に出生舊地の浪華をはなれとあれば浪華の人なること知るべし)幼より好て書を読み前川由平に就て俳諧を學びしが其性活達銳敏にして年未だ二十に滿ずして談林派の宗匠と仰がる曠達にして物に拘らず酒を好む或夜酔て恠しき様にて道を行けるを番卒見咎めて名所を問へども言はず捕へて獄に繋がるゝ事數日門人所々を尋て遂に官に訴へしにより始めて出る事を得たり人々獄中の憂苦を慰め訪ふに自炊の煩無くて長閑なりしといへり又或年の大晦日に門人より雜煮の具を調して贈りこれは此頃は酒をのみ吞て食に乏し是よき物なりとてやがて煮て喰て「我春は宵にしまふてのけにけり」と口號たり寶永五年十二月大阪大火に來山の庵も類焼して其所在分明なら

ず門人等諸方を尋ね求めしに今宮廣田の森の非人小屋にありて蓬髮襤衣臭氣紛々たる非人と相伍して俳句の點をなし居たりとぞ世に傳へて言ふ來山或年の暮に「御奉行の名さへ覺えず年暮ぬ」との發句せしに人口に嘖々し遂に奉行の聞に達し句の趣意をも究めずして大阪を放逐せられ今宮に移り住むことゝなり「今宮は虫所なり聾なり」と吟せりと此說來山晩年今宮に移住せるより構造したる後人の附會ならんといへり來山の今宮に移りしは寶永の末より正徳の初ならんと云其遺跡十萬堂今尙今宮村東南の端に現在し室谷某の所有にして來山の肖像も堂内にあり圓顱方面鼻高く眼銳し黒色に藤鞘繪の紋ある羽織を著し淺黄色の衣服に細帶の如きものを前にて結べり十萬堂の額面は黄蘗悅山の筆也宗因の門下西鶴舊徳の如き多才なりと雖も來山が奇正にして古今を錯綜するに及ばず西山の一派此人出て大成せりと言べく其行狀を見るに老莊

者流に類し尋常俳諧に齷齪するの徒に非ずと云へり享保元年丙申十月三日六十三歳にて十萬堂に病没す墓は坂松山一心寺にあり來山辭世の詞來山は生れた咎で死るなりそれで怨も何も彼もなし來山終身娶らず陶製の女人形を求め愛翫して記を作る其文殊に名高し人形は今河内八尾在の人所藏すと云ふ

女人形記

西行法師に銀猫を給ひけるに門前の童子にうちくれて通りしとかや曰くこそあらめ我は道にてやきものの人形にあひて懷にして家に歸り晝は机下にすへて眼によるこび夜は机上に休せて寢覺々々の伽とす世を見れば畫木の達磨などを崇めて科もなき身を白眼つめらるゝよりははるかにましてんやものいはす笑はぬかはりには腹立てず恪氣せず蚤蚊の痛を覚えねばいつまでも居づまるを崩さず留守に待ら

んとの心遣ひもなし酒を飲ぬは心うけれどさもしげに物食ぬはよし白きもの塗ねは剝ることなし四時同し衣裳なれども寒暑を知ねば此方氣のはる事さらになし夏はむかふに涼しく撫るに心よく冬は爐のもとをゆるさねはよい加減に暖なり女の石になりかたまりしためしを思へば石が女に化すまじきものにもあらずものにあたらすば千歳をふとも變すまじきかたち風老がなからんあとの若後家さりとは氣づかひなし舅はいづくの土工ぞや出所をしらずあらうつゝなのいもせものがたりやな

折ることも高根の花や見たばかり

其發句

梅の花名に呼よくて匂ひかな

見かへれば寒し日暮の山櫻

ほととぎす裸で起きて橋二つ
早乙女やよごれぬものは歌ばかり
干綱に入日染つゝしぐれつゝ
花咲いて死ともないが病哉
雨戸こす秋の姿や燈の狂ひ
初夜と四つ争ふ秋に成にけり
松の月枝に掛たりはづしたり
我ねたを首あげて見る寒さかな

舍 羅

元祿の頃浪華に住して貧と雅には名を得たる者なり崩れ傾きたる軒端
に菴をかけて雨露を凌ぎ菰を敷きて褥とす家に儋石の儲なく一妾一女
と陋巷を樂む加賀北枝其風流を傳へ聞きその庵を訪ひけるに幸ひ舍羅

家にありて日の暮るまで語り續けぬ兎角して腹も空しく成けれど亭主
飲食の設けなし北枝堪かねて何ぞ腹ふさぐ物やあると尋ね問ふにこた
へて壁立の貧家まうけべき一物なしもしやそれなる紙袋に米のあらば
焚てまゐらせんと北枝たつて之を探るに漸く米二合ばかりもあらんと
いふ舍羅曰其米にて四人の口腹を養ふべしさすれば腹ふくるゝ程はま
ゐらせじと北枝あきれながらも其識量の卓爾たるをば感じたりとかや
或年舍羅より勾空へ遣す文に

去べき處に游吟して歸り見候へば隱者臥所に夜盜入りたりとて邊
りのともがら訪ひわき候入べき所もあるべきに仕合のなき者にて
候されども是ぞと心掛たるにや大事の盃なくなり候へは「盜も酒が
なるなら朧月」とまうして打臥申候其頃惟然坊此地に居られ候て「ぬ
すまれて手柄ぞ花に何處なりと」

其句に

蒲の穂や倒けかゝりたる軒の妻

白菊のそろふた畑や九月盡

稻津祇空

浪華の人椎本芳室の兄なり初め清流と號す俳諧をよくし宗祇の風流を慕ひて諸國を漫遊し箱根の湯本に至り早雲寺の宗祇墓前に於て剃髪して祇空と改む其時偈を作る

七顛八倒五十二翁蓬頭薙却明月清風

又發句に

我がげもかみなづきなり石の上

遂に東奥羽越の間を行脚しかへりて江戸へ出て暫く深川に假居す蝸屋の口號

寝ぬくまる間にござつく紙子かな

梅屋敷へまかりて

梅さかり手をひく程のゑひもなし

女達磨の畫賛を好まれてそもさんかこなさんがと端書して

九年何苦界十年花ごろも

大徳寺の大心禪師それを聞てよく禪意にかなへりとして深く賞嘆せしとなり後洛北紫野にすめる頃は敬雨といふ世に紫野の敬雨といへるは是なり晩年浪華より江戸へおもむくの途中湯本の里に於て没す時に享保十八年癸丑四月廿三日年七十一

遺偈

舉手動足平生神通鏡牛破裂音信不通

辭世の狂歌

此世をばぬらりくらりと死ぬるなり地獄つぶしの極樂之助
門人相謀て宗祇の墓側に葬り碑をたて、玉笥山人と追號す又靈を深川
八幡社内につるといふ門葉多き中に江戸にて四時觀と稱する祇徳、祇
明、衣邦、空隨、魚貫の徒殊に長せりといへり

野 坡

越前の人初め江戸に出て桃青の門に入り後浪華に住す氏は竹田字を彌
亮といふ樗木社、又淺生庵と號す晚年先師の無名庵を高津にうつして高
津野翁と稱せり蕉門の徒に附合の體を備へたるは此人に超たる者なし
となむ發句また妙なり

子規顔の出されぬ格子かな

長松が親の名で來る御慶哉

はき掃除してから山茶散にけり

此頃の垣の結び目や初しぐれ

或夜盜その家に忍入たり野坡相對して云く我一物の貯なし唯茶一斤と
のへ置けり今夜寒ければ柴折焚て心よく寛話すべしと盜うなづきな
がら彼此うちながめつゝ机上に草庵の急火を逃れ出ると端書して「我庵
の櫻も寂し煙先」とあるを見つけ何の火事にやと問ふ野坡しかく「のよ
し答ふ左あらば今目前の有様も句作なるべきやと野坡すなはち垣潜る
雀ならなく雪の跡」と盜大に感じて出でゆきけり元文五年庚申正月三日
無名庵に没す年七十八小橋寺町寶國寺に墓あり又天王寺元三大師堂西
に碑ありこれは寶曆十一年湖白庵浮風其門人と謀て建る所なり

北條團水

井原西鶴の門人にして白眼居士と號す生涯清貧を樂みて阮籍か操あり
といふ西鶴か没後京より浪華に來て七年其舊庵をまもれりとぞ西鶴の

墓も下山鶴平と此人とが建る所なり正徳元年に没す其作

ぼたくと山茶の落る朧月

御幸にも編笠ぬがぬ案山子哉

八朔や町に行燈の一つづゝ

辭世

おぼろおぼろ引べく胸の月清し

桑老父 婆東 女媒

老父桑原氏名は貞雄浪華の人なり來山の門に學び五流齋と號し布門と稱す晩に桑老父と稱せり來山の流派を唱ふる事四十餘年寶曆六年丙子二月三日没年六十六碑は茶臼山邦福寺にあり高宮環中撰文 婆東名は邨雄初め彦三郎後に婆東と稱す桑老父の子也其氏井上と稱す父の業を嗣ぐ明和二年乙酉十一月六日三十八歳にして没す碑は父と同

所にあり高宮環中撰文

女媒は老父の第二子名は季雄字は後卿官龍と號し女媒と稱す初め醫を業とす兄婆東没せしにより父の業を襲ふ人呼て三世五流齋といふ人となり清直にして能く父訓を守り自ら勤め嚴格に他の俳家者流の徒に滑稽を事とするが如くならず性酒を嗜めども劇飲を好まず前後の句作三萬椿龜鑿貫首編の諸集五六萬吟に至る寛政元年巳酉二月廿二日没年五十七墓は父と同所にあり碑文は鈴木寛裕撰并書也

半時庵 淡々

江戸の人氏は松木寶井其角の門人森三楊と稱す京都に上り六波羅の邊に住み俳諧を以て一時に鳴る享保十九年浪華に移り流派を弘め延享の頃は江戸堀五丁目に住しか後堺の津只清か隱居に移り又大阪心齋橋筋飾屋町木村氏が座敷にて寶曆十一年辛巳十一月二日に没す年八十八百

川長水と諡して難波瑞龍寺に葬り墓には石碑を建てず自然石を置き一樹を植たり俳諧にて富を致せしは淡々と建部涼袋との二人也とぞされば其奢侈も甚しかりしより或る年尾州の横井也有淡々が己を高ぶり人を慢ると傳へ聞き初て對面して「化物の正體見たり枯尾花」と口號みて之を誡めたりと云一書には西國の人菊車と言へるが淡々を訪ひ來れるに病なりとて遇はず強て面會を求めしかば淡々緞子の蒲團を重ねて繻珍の夜着を被り盛粧せる女に扶けられて起き片手をあげて無禮を謝するの狀をなして何の挨拶をもせざりしかば菊車其不遜を怒り歸るに臨み玄關にて化もの、句を口吟して去れり淡々後にて菊車の人柄を評して其の句の拙陋を嘲りしと記して末の句を雪の朝と爲せり又一書備前の人文庵淡々が撰みし俳諧三部經に古人の句を攘竊するもの多しとて淡淡に逢て化物の句を吟して返しを求めしに淡々閉口せしとて誹れりこ

れは末を雪の暮とす何れか是なるや必竟流派の異同より褒貶區々にて言傳へしなるべし又淡々が濶達なる所爲として言傳ふるは福島にて宿茶に虎屋饅頭を配りしこと（當時世人の爲る所に超越せしをいふか未詳）生玉に人丸社を金二百兩にて一建立せしこと夢想俳諧開きに瑞龍寺に松を植しこと一生京の水より飲まざりしことなどなり兎に角超凡の氣象ありしを見るに足れり其妾をさきと言てもと南地の妓なりしが妾となりて後病にかゝりおひくゝ重りゆきて今はに臨み淡々に向ひこれまでの御恩忘れがたく忝なし妾死して後も必ず一家の者が事御頼み申ませぬと言へり淡々聞て頼みまするといふ舌のもつれたるならんと思ひて再び問ふに病人頭をふりて少しも頼ませぬなりあのそのぬでござりますといひて笑ひくゝ死たり淡々も此妾を蘇學士の燕々張建封の阿々にもおとらじと自負せしとぞ淡々發句

古稀の春

貧乏の年なりけりな福壽草
 雉子啼や雲のさけまの不動尊
 蚊に寝ぬ夜一とせ嗟峨の山櫻
 森の鶉の憂をうらやむ筈かな
 朝霜や杖で書きし富士の山
 淡々生前四季の辭世を作り其月を定め置しが其内の一は此句なりしに
 果して十一月に没せりとぞ

浦川富夫

清得舎と號す淡々門人明和四年丁亥五月十日没八丁目寺町聖祐寺に葬
 る

八千房舎椗 五竹庵木仙 八千房屋鳥

舎椗堀氏深茂亭と號す淡々の門人にして俳諧に名あり安永四年乙未八月三日没年七十一墓は難波瑞龍寺にあり

木仙竹上氏丹州の人舎椗の門人にして初め八千房陀岳といふ後に五竹庵と更む俳諧に名あり文化十二年乙亥正月五日没墓は舎椗に同じ又天王寺東清壽院にも碑あり

屋鳥石井氏名は堅字好卿作州の人八千房と號す文政十三年庚寅二月廿四日没年七十六墓は瑞龍寺にあり

小野紹蓮 加島白羽 茶雷 茶裡 萬翁

廉山

紹蓮一に紹廉に作る水間沾徳の門人にて銀竹堂と號す西山宗因派なり後に一炊庵と改む大阪に住す寶曆十一年辛巳十月十四日没年八十六北野善通寺に墓あり

白羽十南齋と號す紹蓮の門人延享年中獨吟萬句を催し其名浪華に鳴る
寶曆五年乙亥五月十六日沒墓は紹廉に同じ
茶雷山縣氏十南齋又東居齋と號す白羽の門人安永元年壬辰六月十八日
沒墓は上に同じ

茶裡十南齋と號す茶雷の門人文化五年戊辰八月二日沒年七十三辭世

死は冷し七十三の惡まれ子

墓は同所

萬翁俗稱鏡屋莊左衛門浪華の人紹廉の門人二世一炊庵

廉山名は了胤姓楠浪華一向宗定專坊の住持紹廉に學ぶ安永八年己亥二
月十日寂年四十九一心寺に墓あり

田鶴樹

貞徳派の俳人にして浪華の人なり初め學を嗜み詩を賦し漫遊を好み九

州を游歴せし頃筑前の山中にて道に迷ひ谷蔭の農家をたのみ舎て一間
に休らひぬ宵過て人音すれば怪み見るに荒男刀を帯びて家に入りぬこ
は山賊の住家なるやと驚き居しに頓て彼者ども刀を傍へ置き懷中より
書を出し主に習ひ首をたれて學びぬ四五人かはり讀終りて禮をなして
歸れり翌朝ことよしを聞き教へ給ふは何の書なりやと問へば主答て
貝原先生の作り給へる農業全書にてはべり農家には益ある物なれば彼
等深山を越えて夜々來りて學ぶよしをいへば田鶴樹殊勝の事に感じ貝
原の徳を思ひ是より詩文を廢し假名書をよみしとなん其歌
暮ぬとて眞柴負つゝあはれにも世渡る道をたどる山人

大江丸舊國

大伴氏浪華の人大島蓼太が門人文化二年沒年八十八

不二庵桃居

勝見氏名は元茂二柳と號す加賀の人幼より俳諧に遊び桃妖を師とす年長するに及び四方に游歴し備に嶮岨艱難を嘗め常に芭蕉門流の衰弊を慨き挽回の志あり年五十にして大阪に卜居し芭蕉堂を建て其百年忌に當り三日間法會を修行して追善の句を選集する等其名高く門に入る者多し是に因て二條家より特に褒章を下して中興宗匠と稱せしむ享和三
年癸亥三月廿八日八十一歳にして没す墓は口繩坂梅舊院芭蕉堂の側にあり

佐々木泉明

俗稱住吉屋市兵衛浪華四ツ橋の北に住し藥酒を賣て業と爲す性淡泊にして蚤く俳歌を好み單身獨歩四方に游歴し名勝を問ひ奇隱を搜り興到れば吟咏以て樂みとす明和六年の春東游して奥州に到り夫の西行が道邊の清水を咏せし柳を見て其一枝を折て携へ歸り之を我家の圃に挿植

せしに根を下し葉を出せしかば之を天王寺村吉祥寺に移植し廣く詩歌俳句を募輯せしに千餘首を得しかば之を柳の本に瘞め碑を建て奥田仙樓に乞て之を記せしむるなど風雅の志見るべし寛政五年癸丑六月三日没年七十八吉祥寺に葬る

狂歌

行風

字は懷忠大阪の人高津に住し狂歌に名あり生白堂と號す寛文中續夷曲集十卷延寶中銀葉集を選著す其詠

慾垢はたへぬ浮世の嵯峨の釋迦お身ぬぐひにもとれる散錢
風の手よ斟酌なしにふきちらせ豆名月のさやのうきくも
金はらふ迹よりこひのせめくれば傾城やこれ煩惱のいぬ
我法の味をばちともなめしらで魚くふにのみ口をあく僧
老にけり皿ほどな目でありながら秤の星の見えわかぬまで

住友友信

浪華の人行風同時代以下の人々も同じ

散錢も所によりてかはりけり難波のあしを伊勢は鳩の目
やれいそぎ用意をせよと夕立や刀のさやに大井しぬめり
雨雲を見つげに風もふくろ井と駒にむちうち懸川の宿

淨久寺一圃

浪華の人

あらさむやあらさむやとてけふからは神なづきんをかつくべき也
旅人の口なぐさみにすまの浦關吹こゆるたばこ一ぶく
我こひはせひたかひきの駕籠かきの迹先あはぬかた思ひかな

平野行重

浪華の人

目には見てくはれぬ物はうすはたにつきたてゝある餅つゝじ哉
冬さればさむくつめたき老が身の夜床の伽におこし炭かな

風呂の湯女それもくどくかくどきより垢はおとさで坊主おとせり

平子政長

浪華の人天満に住す

呼子鳥古今の中の大事ぞと聞たるばかりゆへはるしらす
けんそなる秋の山田をもる庵は鹿をこゝろにかけ作りなり
偽と思ひながらも鐵炮のはなしにきもをつぶしぬるかな

法橋由己

浪華の人天満に住す

君と我つれふきにする尺八は是ぞ浮世の中のらくあみ
筆のさきそめし如くにつぼめるはいかなるものをかきつばたぞや

永田貞因 同 貞富

貞因通稱は鯛屋善右衛門菓子製造を業として新に玉露霜と云へる菓子

を製し出せり御堂前に住み受領して山城大椽藤原貞因と稱す松永貞徳
の門に入り俳諧を學び又狂歌を能せり貞柳の父なり一書に榎並氏とす
元祿中没す

御ほとけは常住不滅ときくときはけふのねはんは空死ぞかし
菩提をも植木にありと思ふかや花見がてらの寺まいり衆
大ふくの茶の湯を好むしるとて門口にまでかさね炭かも

貞富は貞因の弟花實庵と號し狂歌を善くす行風が續夷曲集中貞因兄弟
の詠を載すこと多し中にも貞富の詠最多く總歌數千六百七十餘首の内
百七首ありて集中第二に居れり子を長丸といふ亦狂歌を詠す

今までは寢いりて居たる木の目をも起て出よとふれる春雨
是はよいはなしの種で候よわか木なれども姥ざくらとは
戀に心みだれ及かつかの間もはなれがたなや君がこしもと

まつすぐに杉のまさめの木心を人こそまもれ三輪の明神

永田貞柳

貞柳は貞因の子なり名は信乗父の業を繼で菓子を製し受領して山城大椽と稱す南御堂前雛屋町西南の角に住せり八幡山なる玉雲齋信海の門に入て狂歌を學び其名世に高く狂歌の中興と仰がる或年奈良の墨工古梅園主人松井和泉貞文が方圓二個の大墨方形豎一尺四寸横一尺二寸厚二寸五分圓形徑一尺四寸厚二寸五分重各二十斤餘を製して堂上に聞えあげ九重の叡覽にそなへたりと聞て其はまれを賞して

月ならで雲の上まですみのぼるこれはいかなるゆるんなるらんと詠して貞文に贈りければ是より世の人貞柳を指して油煙齋といへるを聞て又

わが歌の聞えあげぬるゆるんこそ墨よしさまの惠なるらん

油煙齋と世にうたはるゝころもきぬ心をすみに染まほしさよ

七十に餘りて後の油煙齋彌陀の淨土をすみところとは

享保十九年甲寅八月十五日八十一歳にして没す辭世の詠

百居ても同じ浮世に同じ花月はまんまる雪は白たへ

碑は新清水西坂下にあり二十五回忌辰に狂歌師松濤芙蓉の建る所にし
て林孝徳撰文也其詠歌人口に繪灸するもの多し其二三を掲ぐ

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれけれどもけれどそうじやけれ

ども

住吉の木のままの月のかたはれは有けるものをこゝに反りはし

西行に杖と笠とは似たれども心は雪とすみぞめの袖

此歌似雲法師が詠しと云ものと同じけれども貞柳が門人木端の著せる狂歌訓に貞柳の詠として擧げたればこゝに出す

終に行く道とはかねてなり平の業平のとてけふもくらしつ

述懐

にくまれていきたるかひはなけれどもかあいがられて死よりは
まし
百人一首にたそ有るとても元日のあかつきばかりよきものはな
し

栗柯亭木端

大阪の人一向宗の僧にして貞柳の門に學ぶ貞柳没後世の狂歌をよむの
徒其遺訓を失ひよみかたひがみ行くを本意なく思ひ其身が貞柳より添
削をうけたるまゝの狂歌集を梓行して真寸鏡と名付けて世に弘め又貞
柳が三十三回忌にあたり狂歌訓を著して貞柳派のよみ方を世にしらし
む門人多し安永二年癸巳七月七日没年六十四墓は天王寺東門の北壽法

寺にあり其一二を掲ぐ

花街忘歸

かへんなんいざともいはす山の神まさにあれなん忘れくるわに

高雄山の紅葉を賞して

くらべてはまことに雉とたかお山蹴落されたる余所のみみじ葉

四橋に月を見て

よつはしの中を碁盤とうち詠め白のせんかとおもふ月影

八月十五日ひのほどより酒たうべて

月見酒くれぬうちからのみかけてすぎにけらしなに見ざるま
に

おしかけてよきは肴の鮓ぞかし心やすしはなれすぎていや

松濤芙蓉 一睡亭海棠 一本亭魚鱗

一本亭芙蓉花と號す初名は栗里大阪の人狂歌を善す貞柳が二十五回忌に碑を清水坂下に建つ嘗て

磨いたらみがいただけはひかるなり性根玉でも何の玉でもと詠みたりしが世上に傳播したりければ京都にて何人にや

光るかやこんにやく玉も藍玉もたどん玉でもふぐり玉でも

と戯れて嘲けりたり天明二年芙蓉江戸に下り淺草觀音堂へ自ら畫ける寶珠の畫にかの歌を題したる額をかゝげたりしに何者にや

みがいても磨いただけはひかるまじこんな狂歌の性根玉では

との落首をしたりこれは當時江戸狂歌の體に合はぬをもて嘲罵したるなり天明三年癸卯正月廿六日没す碑は貞柳と同じく清水西坂下にあり一睡亭海棠享和元年辛酉八月没碑は芙蓉と同所にあり一本亭魚鱗文政七年甲申十二月廿五日没碑は上に同じ

如雲舍柴笛 栗洞 栗標 義栗 華産

柴笛俗稱新右衛門木端の門に入て狂歌を善し後一家を爲す原來禪學を好み臨濟派に投して僧となり拙堂と改め三番村貞圓庵に住持す著述の書あり安永八年己亥八月十六日六十二歳にして寂す貞圓庵に葬る其狂歌の内

高平山に春を迎へて

人も來す節季もこざる山寺へみごと來にけるこの花の春

八百のうそを上手にならべても誠ひとつにかなはざりけり

北長柄の草庵より月を見て

寝ながらに戸を明ながら蒲團をばきたながらにて月見するなりくちびるのべにのはげるや厭ふらん笑ふばかりにもものいはぬ花ほとゝぎすといふ事を句の上へて郭公の歌に鳥名十

ほうん家鶏かけてとひなきしつるときをしろさかはみゝをもす
ゆへかりけり雁

栗洞如棗亭と號す木端門人寛政三年辛亥十月十七日七十二歳にて没す
千日法善寺に葬る其歌

十五夜月

花の詠め雪のけしきを中空にひん丸めたるけふの月かけ

夏 晝

をよぎつく様にいそいで来て見ればのみたい水もかはく夏河

秋夕案山子

をどさるゝ鳥はのこらず宿とりてかゞしばかりの秋の夕ぐれ

栗標條果亭と號す木端門人寛政六年甲寅七月廿一日六十四歳にて没す
清水寺坂北泰聖寺に葬る其歌

欲言懸戀

ちりめんを捻りまはしてとそいほとひつた鹿子ののりはりをす
る

似雪綿

鬼瓦にふりつむ雪は伯母が着し綿帽子かとおもふ破風口

墓原秋雨

あきさめに草木しほれて五りんたけ余所より哀れ強き墓原

義栗園果亭と號す木端門人寛政七年正月四日没墓は福島妙徳寺にあり

夏 晝

ひつみなき日かげにひるねする大工背筋のみぞに汗の水もり

述 懷

辻能の獨うつたり舞ふたるで腰のかゝみの間のなきぞうき

時雨案山子

さむ空に動かで行義かたしぐれかゝしなれども弓取の身は

醜婦耻身

よめいりを又のばしたはわしが貌の道具そろはぬ故とはぢらふ

華産岫雲亭と號す木端門人

平野大念佛寺の練供養に參詣群集しけるに

そくいひのゝりのをしへの練供養へらへいたうにませ返しけり

郭公

まゝ母にかけたかとなけ鶯の子で子にならぬほとゝぎすなら

大晦日

細布のけふばかりなることしとてかねの工面に胸あはぬなり

八十八夜の日出替りせる下女の主に名残惜みける席にて

出替りおりは八十八夜にてけふをなごりのしもの女衆

廿年の春秋の過ぎしはいと早きものなりといふ人に

はたとせの月日のたつは片假名のさを投る間のうちでござるよ

玉雲齋貞右

貞右姓は雄崎名は勝房俗稱尼屋市兵衛浪華の人芥川貞佐に學で狂歌を
善す初め混沌軒國丸と號す門人一千三百人其内某丸と號するもの四百
人を上足の弟子とす世に丸派と呼ぶ或年貞佐より塵拂文臺を傳授し且
書を贈て日子の意匠師の右に出づ宜しく貞右と稱すべしと因てこれよ
り貞右に更む烏丸光祖卿十題の狂歌を需めしに貞右之を詠進す卿賞す
るに玉雲齋の額字を以てす

塵拂文題とは昔豐藏坊信海より永田貞柳に授けて狂歌傳統を證するも
のなり貞柳之を貞佐に傳へ貞佐之を貞右に傳へしなり玉雲齋の號も信

海の別號にして傳法と共に授受するものなりとぞ寛政二年庚戌二月廿四日没年五十七墓は一心寺にあり

寒からず暑からず日も長からず何くらからぬ明月の空

仙果亭嘉栗

嘉栗は三井氏入貫とも號す狂歌を善し又淨瑠璃を戯作し紀の上太郎と稱す寛政十一年己未四月廿四日五十三歳にて没す墓は生玉南西方寺にあり

鍊格子波丸 後鍊格子獨醉

波丸は西浦氏俗稱木津屋周藏立賣堀二丁目に住す混沌軒國丸の門人にして狂歌を善くす其生業鍊問屋にして表の格子を鍊にて造れり故に鐵格子と號す又糟長者の戲號あり自詠の狂歌集及ひ紀行の書且かはごろも小説葦芽草紙の著述あり文化八年辛未正月七日没高津社内に歌墳あり

獨醉俗稱西浦周歲立賣堀二丁目に住み狂歌及詩を善す

佐藤魚丸

浪華の人阿波座豊島町に住す國丸の門人にして狂歌を善くす蝙蝠軒と號す自詠の狂歌集あり又淨瑠璃を多く作る作名を佐藤太といふ

諸家

有名にして一藝を以て名く可らざる人及技藝の人にて
も其數少くて一部を立るに足らざる人を記す

淀屋个庵及子孫 同辰五郎 乘圓

名は言當通稱三郎右衛門玄个庵又古庵と號す氏は岡本父を與三郎常安
と云ふ山城の人織田信長に滅され大和に潜居す豊臣氏の時に及んで大
阪に出で十三人町(今大川町)に住し材木を商ふを業とす元和偃武の後官
に請て中之島を開拓し同五年功を竣るに及び二町歩の地を賜はりて其
地に別居し總年寄を勤む其居趾今の常安町是なり其家を長女に傳へ元
和八年七月廿九日没す个庵は常安の長男なり大川町の家を嗣げり連歌
を善し抹茶に巧に古今傳を源光寺祐心より受け又戲畫を能くせり當時

の名士石川丈山佐川田喜六瀧本坊昭乘澤庵和尚等を友として親善なり
寛永二十年癸未十二月五日没墓は父と同じく谷町大仙寺にあり男子な
し甥个齋を贅養子として家を讓る

箇齋は个庵の第五郎右衛門道雲の子也正保年中より諸大名より大阪へ
の回米を引受け其宅前にて市を建て賣捌けり是堂島米市場の濫觴なり
故に明治の初までは正月四日初相場を淀屋橋南詰にてたてしは其餘羊
を存せしなり个齋慶安元年戊子七月十二日没す墓は父同所にあり子重
當家を嗣ぐ通稱右衛門太郎後に三郎右衛門清味軒个庵と號す元祿十年
丁丑四月晦日没墓は前と同じ辰五郎は重當の子なり初め三郎右衛門と
稱す累代の富豪に生長して奢侈に耽り新町の遊女吾妻を落籍し遊里へ
白無垢の服を着して入込たる等不法の罪に依り大阪三郷を逐はれ家財
は沒收となる舊來の緣故に由り城州八幡に往き社人となり吾妻を妻と

し下村个庵と稱し生涯を送る个庵の女を五百といふ八九歳の頃兩親没せり同社人謀りて四方田忠次郎と云者を婿養子とし下村左仲と名乗る左仲放蕩無頼にして博奕を好み家産を蕩盡す同社士之を憂へ相謀りて離縁し實家へ立歸らん事を談ず左仲其身に過あれば辭するに言葉なく承諾せしも未だ離縁狀を與へざる間に京都に至り歸らず社士之を幸とし大野左門と云へる浪士を入夫とせんとし雙方納得して未だ表向き弘めは爲さずれども五百と婚姻を爲さしめぬ然るに左仲之を聞て大に憤り同志をかたらひ八幡に至り其宅に忍入り左門の熟睡を窺ひ之を斬殺す五百其頃名をさいと改め居しが驚き覺め此體を見て端座し首を延て先夫に斬らる是元文元年辰の四月なり左仲は離縁の證分明ならざるより密夫を討たるとの事にて罪せられず然れども世人皆之を惡みさいを憐む後に左仲博奕の事により流罪となり十餘年を経て赦され歸り來り

しも人々昔の所行を忌み惡みて便るべき方もなく淺間しき様にて道路にさまよい果しとぞ

乘圓字は朗然岡本道雲の男玄个庵の甥にして城州眞言宗五智山の開祖也幼にして八幡男山の昭乗に従ひ落髮緇を被て瑜伽を修習し萩の坊に住す壯年に及び錫を智積の教鬘に掛け隆長宥貞運敬の三師に歷事して機鋒を研き一時の明德諮詢せざるなし益々根嶺教義の幽願を探る義解日に進み或時運敬僧正勅を奉し講を仙宮に開く十義虎を撰ぶ乘圓も亦之に預る嘗て密乘院宥雄に謁して諸尊の秘軌を稟け營構の志あり五智山の荒榛を披て之が興祖となり灌頂壇を建て徧く四部を化す尋で六波羅密寺に住す玄々子又玄々翁と號す天資温厚風神高邁修學の餘暇には書畫を松花堂に學ぶ書は尤も草隸を善くす畫は特に其長する所たり圖によりては師よりも稱譽せらるゝものあり大著色のもの最佳なり寛文

十三年五月廿一日寂年四十六或は云延寶三年四月廿六日寂す年六十三

刀工初代國助 四代目國助

初代河内守國助は勢州龜山の城主關一政の騎士なり關氏滅亡の後京師へ出堀河の國廣が門弟となり刀劔を造り又大阪へ移住す法名叟眼と云慶長慶安の間業物河内守藤原國助と銘す

四代目國助は幼くして父の國助におくれ奥義を習ひ得ず故に小林伊勢守國輝にちなみて鍛煉の術を學ぶ國輝は初代河内守が弟子にして二代目國助とは兄弟の如く馴親みし者なれば當國助をも子弟の如く怜で教導しけるに國助も深切に學びしかば大方の事共は相傳せしかど湯加減の一大事は唯受一人の秘傳なれば曾て趣をだに語らず唯自得發明の位なりといふまゝ國助も種々心を用ふれども父祖の作に似るべくもなく國輝の倣もうつりがたく爰に勞する事年ありしが忽一策を思出けるは

國輝一人の女を持てり貌醜陋にして人の求む可き女に非ずされども心ばへはなだらかにして能く父母につかふるまゝ國輝は深く愛したればかれを乞請て妻とし婚姻の中とならば別して外ならず思ひ彼湯加減も傳授すべしと媒妁を求めいひ出せしに彼女が醜き事は親も知れる所なりしかのみならず固貧家の女甚だ嫁しがたきを愁ふる所國助が志全く師資の義を重んずるならんと大に悦び頓て領掌し婚儀を調へて年月を重ねて往來すれども件の一大事は露いひ出づべきけしきもなく國輝が氣象元來一哲なるものなれば此方より願はゞ却て機嫌に背き向後をも誤るべしと思ひ國助もあまりにせんかたなく妻に語らく汝をむかへて妻とし侍る事餘の義ならずかやうかやうの事なりいかゞしてか本意を遂んといひければ妻も流石に鍛工の女なれば其道に切なるを感じ然らば我に一策あり老父近日一刀を鍛煉し湯をわたさんとする刻をうかゞ

ひ急に童が大病發せるよしを告たまはゞ取物も取敢ず來り玉はん其時跡をうかゞひたまはゞ湯加減を知らん事必定せり追て父の咎めありともそれはよきに詫べきといひしかば是最上の手段なりと謀を極めて待所に何某の家より命せられし刀劍鍛煉の事ありて國助も合鍛に行て鍛へ湯をわたさんとする時國助が小厮大息切て走り來り家童子急に病發して絶入し玉へりと告しかば國輝大に驚き疾く行て見るべし河内もいざといひながら側に在し一桶の水を彼湯舟にとふと入れて走り出たり國助は此體を見て謀やぶれ茫然として居たりしに國輝は國助が家に至り見れば女は尋常の體なれば再び驚き所以いかんと問ふにしかゞのよし今はつゝまず語るうち國助も走り來りて先生の業に切なる火急の期に臨みて大事を忽にせざる所誠に無孔の鐵鎚企て及ぶべからずと涙を流し蹉跎して我謀計の罪死に當れりと謝せしかば國輝も甚だ感慨し

父祖以來の知音といひ婚姻の間の事何かおしむべきならねども聞や及びぬらん古も是を窺て片臂を打落されたるもあるものををぼろげに傳ふる事にしてあらざれば深くおしみぬ今は重々の深志を見届侍れば此上は相傳せしむべきとて委しく傳へけるさてこそ其後は國輝國助一雙の名劍を鍛ひ出せるとぞ一日國助の許へ或國侯の臣來りてしかゞの刀劍鍛へよとの事を屬する序何事も昔さまはかしこく近代はおとろへたるが中にも鍛冶は別して饒季に至りぬ昔の名作は妖怪を見ては自ら鞘を離れて追たるなどのためしもあるに今は人は是を揮廻せども犬猫もおそれず剩へ過をなしてはわざはひを引出さしむるやうに成たる口惜さよといひしかば國助温和者なれども家業を譏られしをや怒けん又は理の闇をや思ひけんそれは仰にて候へども愚なるに似たる御詞なり只書に傳へ口碑に残るをもて誠とし給はゞ大なる誤を傳へ給ふべし固鍛

冶の術は五行の精性を選び工人の神魂をこめて鍛ふる事にして奸邪を破り朝敵を亡し此劍を以て四海安寧天下太平たらしめん事を祈り帶る人の徳を助け害を除く寶器たらん事を期す千古村正は既に名作なれども心裏の惡念によりて世々の武將に害有て千歳に名を下せり近代加州の勝國勝家は鍛ふる毎に陀羅尼を誦し此劍を帶する人武運長久たらん事を祈るよし浮屠の呪をなせるは神國相傳の鍛冶には口惜しけれども志は尊くこそ覺え侍れ抑漢高の三尺の劍四百年の基業を開き日本武の尊は艸薙の劍もて東夷を征す是名劍の徳のみといはゞ安德帝西海に歿し玉ふ時に至て寶劍何ぞぬけ出で義經が首に至らざる凡劍は人に依て殺活をなす其人の徳と劍の徳合する時は四百年の基をも開くべく東夷をも征すべし薄徳の人に於ては劍徳自ら闇みぬべし鏡は美人の爲に愛せられ醜婦のために憎まるゝにても察し玉へそれを自ら鞘を離れて妖

物を追懸しなどゝのみ心得玉ふは古の名鍛冶を幻術者とばし覺え玉ふにやさて又今の鍛冶の刀劍の古に及ばぬと云事物毎末世の衰微淺薄は論に及ばずながら上古の淳厚の世風は姑く舍く中古戰國の世も陣頭に臨に至りて唯頼むべきものは腰間の二刀より外なし國の興廢家の存亡身の生死の預る所なれば刀劍のために金銀を惜まず力を盡して命するゆへに鍛冶も費用の儉約を思はず精に精を加へて打出せば自ら絶世の劍も出来る今は治平に怠りて腰刀も奢侈の贅物の様に覺えて懸命の要器とはおもはぬ人多く其上古代の上作の刀劍多く残れば今新に二十片三十片を費して鍛へんよりは五片七片にて有あふを求んこと辨利なりといふ了簡なれば鍛冶はいよゝゝ鍛煉の數も少くたまゝ打とても價金をかぎられ費用を省けば事の足ざるのみにて心神の十分を盡し難しされども累世の者は家名を汚さんことを耻れば身骨を碎き丹誠を盡し

鍛るゆへに五片七片の費用にて時として二十片三十片の利刀を打出し得る事もあるは何ぞ古の作者に耻る事あらんや只恨らくは治平の人の金銀を惜みて有功の手を空く老かゝましむる事をこそよし鍛冶のみならず君の臣を使ふにも道を得たる人に道を行はしむる事なく朽果させ唯有來りの年寄給人にて間に合せ玉ふゆへに仕癖のみに泥みて新に仁政を發する事もなく其内には奸邪の者の辨佞に惑されて大なる苛虐を行ひ玉ふもあるぞなげかはしき仕ふる人も道に志うときときは只利徳にのみ耽りて徳ある役を望みさなければ給金相應を勤るを當理とするは鍛冶に劣れる賤しき志にして農工の上にあたつ士とはいひ難しと瀧を流していひしかば彼士は舌を捲て出行ぬ以上は新齋夜話に載する所にして議論堂々記者筆端の敷演潤色の疑なきに非ずと雖も姑く原文を寫し一粲を博す

津田助廣

通稱彌兵衛播州津田の數打師なり大阪に住す初代國助の門に入る寛永承應の間最上大業物銘は攝州住藤原助廣又は大阪住助廣越前守藤原助廣と打つ二代目助廣なり

井上眞改

初め井上和泉守國貞寛文十二年壬子眞改と改む姓藤原父國貞は日向伊藤家の士鍛刀を明壽に學ぶ眞改大阪に住す人となり豪邁正直鍛法父に勝る世稱して大阪正宗といひ之を重寶す實に慶長以降の名手なり天和二年壬戌十一月九日沒墓は谷町寺町重願寺にあり舊碑刳缺猶存す測に天保二年刀劍商工等建たる碑あり八木巽所撰文なり

椀屋久右衛門

椀久は錦町今の大手通一丁目に住て椀問屋を業とし家富み老實にして

曾て花街の地を踏まず其朋友之を嘲り強て青樓に誘ひ辱めんとす椀久が母早くこの事を聞き竊に名娼松山に文して椀久が事をたのみ椀久之を知らず母に告て花街に赴かんとす母云我聞く松山は全盛たぐひなく其心みやびたりと花街に行かば必ず彼をよべと椀久遂に其友と共に樓に登る友人各知れる娼妓をよび迎へ椀久の熟妓なきを笑はんとす椀久母の命を守て松山を呼ぶ松山來て一別の情を叙ること久しく相知れるが如し衆皆思ふに違ひて驚き羞づ椀久もいぶかしくは思ひながらよき程にあしらひ房に入て始めて其譯を聞き母の慈悲を感じ且松山が情あるを悦び馴染かさねて遂に煙花の遊びに耽り家を傾くるに至れりと一説には椀久人に誘はれ花街に行きしにあぶれ者に狼籍せられ詫れども聞入れず打擲せられて衣類裂破れ見苦しき體なりしを偶松山來合せて介抱し部屋に伴ひ衣服を着せ替親切を盡せしかば其義俠に感して馴染

をかさね其身を請出し貧しくなりても添遂げしが年たちて松山病死しければ椀久

波越さぬその松山を見送りて消えぬ露こそ袖に残れる
椀久延寶年中に没す墓は上本町八丁目寺町實相寺にあり宗達の墓としるせり椀久物語は寶永年中に瓢箪かしくといふ法師あり佛説を俗談して人を興し或は河原にたち或は市中を徘徊せしものを椀久に附會して歌舞伎狂言に作りしなりと椀久が東本願寺掛所に寄附せし手水鉢は本堂前井戸屋形の内にあり正保三年十二月九日椀屋久右衛門寄進と刻せり水盤と臺とは別の石なり

天竺徳兵衛

徳兵衛は元和五未年播磨の國加古郡高砂船頭町に生る生れ附活達にして物にかゝはらず幼より文學を好みて十歳ばかりの頃既に日常の文書

往復などに差支なかりしかば人々目するに奇童を以てし後來に望あるものなりと言合へりしとなん
徳兵衛が天竺へ渡りしは寛永十年の事にて其頃は御朱印船と唱へて角倉與市茶屋四郎次郎其他富豪の商人數名官の免許を得て商船を外國に出し交易を爲せしかば徳兵衛角倉の持船にて船子頭高松清兵衛の書役となりて渡航せしを初めとし其後再び渡航せし事あり外國に在し間に諸所にて珍しき堂塔又は其風俗等を委しく書記せしを渡天物語一に暹羅紀行といふ其書今に傳へたりや知るべからず見る人稀也徳兵衛老年に及びて剃髪し名を宗心と改めて浪華上鹽町に住居せり其子は播州へ立歸り赤穂屋徳兵衛と名乗て後々までも榮えしとぞ世に徳兵衛の事を語り傳へて講談師が述べ又演戯に仕組めるにはさまざま附會の事多く甚しきは妖術を使ふ強賊なりといふが如きは虚妄の極と云ふべきな

りさて徳兵衛が出生の年及年齢渡航の年月には數説あり一書には徳兵衛慶長十七子年に生れ寛永三寅年十五歳にて天竺へ渡り同七午年再び外航し延寶八申年六十九歳にて剃髪し法名を宗心といふと有り又一書には元和五未年に生れ寛永十四年十五歳にて外航し同十四丑年再び外國に航し貞享二丑年六十七歳にて死すと爲せり然るに新井白石が采覽異言に徳兵衛角倉の船にて天竺に通商する事二回髪を剃て宗心と號し寶永四年に宗心歳八十九にて尙恙なしと記せり此書は寶永六年十一月白石幕府の命を受けて暹馬人を按檢せしより和蘭人にも質問して記せる所なり又和漢三才圖會天竺の部に寛永十五年至今正徳四年七十七年と小註あり以前は日本人天竺に渡る者多くして存命の者より面のあたり其語を聞き因て俗語を以て之を記す播州高砂の船人天竺に渡り寛永三年十月十六日長崎出帆翌年三月三日天竺摩迦陀國に至云々とあり此に

高砂の船人とあるは宗心のことなる可く二書とも寶永正徳間に成れるものにて其頃まで宗心の存命せしは疑ふ可からず貞享二年に死せりとするは誤なること明なり出生の年を慶長十七年とすれば寶永四年は九十四歳にして采覽異言とは五年の差違ありされど初航海の年を寛永三年とするは諸書大抵同様なれば異言の年齢は誤なるべきか若し元和五年の生とすれば其年齢は異言と符合すれども初航海を寛永十年とするは外に徴證すべき書なく殊に再航を寛永十四年とするは最も疑ふ可し何となれば幕府にて我商船の外國航行を嚴禁せしは寛永十三年なれば其翌十四年に外航す可き理なければなり猶他日の考索を俟つ因に外國渡海船の數を記す

長崎末次貳艘、船本壹艘、荒木壹艘、京屋一艘、泉州堺伊豫屋一艘、京都茶屋一艘、角倉一艘、伏見屋一艘、以上九艘なりしと云

天野屋利兵衛

利兵衛名は直之大阪東堀思案橋の濱に住し代々北組の總年寄を勤め旁ら諸大名大阪藏屋敷の藏本名代を爲し殊に播州赤穂城主淺野家の眷顧を蒙りしが元祿の變起るに及び諸士會議すると聞て竊に赤穂に赴き一臂の力を効さんと乞へり大石良雄諸義士と復讐の議を決するも其事秘密にして盟約者の外之を知るもの無し獨利兵衛は其忠誠なるを以て之を與りき、又良雄より竊に復讐の時用ふる所の兵器類製造の事を依托せられたり既にして義士等三都の間に潜匿して時機を待つ内利兵衛は大阪に在て密に托されたる兵器を造らしめ之を江戸深川奥田孫太夫方に向け出来るだけづ、度々に送るに其事は妻子僕従にも深く隠し自身獨り奔走周旋せり然るに鍛冶に神力丸市左衛門とて内本町に住せる者あり利兵衛より異様なる兵具の注文を受けて造らんとせしが餘りに其

形の常體ならざるより若しかゝる品を造り後日の難儀とならんかと恐れて其圖を以て東町奉行太田和泉守が役所へ届出て利兵衛より注文受しとの事を申立しかば奉行は速かに利兵衛を呼出し訊問ありしに利兵衛答へてこれは盜賊の用心に作らしめしなりと其制作の常ならざるを詰れば曰く或る武士の工夫して創めしものに倣ひたりとて服せず此時市中の鍛冶等利兵衛の訊問せらるゝ事を聞傳へて其注文を受けて兵器を作りしもの我もくゝと訴へ出しかば遂に利兵衛を入牢させて度々拷問すれども白状せざるより其妻子を捕へて嚴しく責問へども唯知らず知らずと陳ずるのみなり利兵衛曰此事妻子等一切知る所に非ず其責は自分一人にて引請なんと依て復水火を以て拷問し身體裂け爛れ氣絶すること度々なれども實を吐かず最後に至り乞ふて曰此事を爲せしには子細ありて初より一命を投げ出し居れば身は粉に碎けても只今は申すま

じ明年の春とならば白状せんと云へり其容貌落付きて言葉も詐り無く聞え悪事を企むべき者とも見えねば官にも其乞を聞入れて暫時拷問を止めたり是れ元祿十五年二月のことなりかくて日月を経て翌十六年の初めとなりしに世間にて去年十二月十四日の夜赤穂の遺臣吉良氏を襲ふて先君の讎を報じたりとの事盛に語り傳へ牢守如きに至るまで言罵りしかば利兵衛牢内にてたしかに事實を聞定めさて申出るよう去年御訊問の事白状仕るべしと因て之を白洲に引出せしに利兵衛が曰某代々赤穂城主の眷顧を蒙り義臣子にひとしききに諸士大事を謀るに當り兵器製造の事を某に托せられたり某之を受入れて造らせたるは即ち其兵器なり今は既に復讎を遂げたりと聞けばもはや思殘すことなし速に刑を被りなん初より事の洩れんことを恐れ又罪に罹らんことを憫みて妻子には一切知らしめざれば仰願くば彼等の罪を宥め某一人を刑せら

れなば死すとも猶生るが如しと言畢て涙雨の如し官其節義を感じ死をゆるして大阪を追放せしかば京都に上り岡崎村に閑居し薙髪して松永土齋と號し享保十二年丁未正月廿七日享年六十八にて没す墓は東山西大谷にありと云ふ抑利兵衛が淺野家の爲め其身命を抛て諸士の復讐を替けしは故あることにて一とせ利兵衛江戸へ往ける事あり折節淺野家へ諸侯を招かるゝ事ありて其日利兵衛は饗應の席に出て給仕したりしに來客さまざまの雜談のはしに或侯何の心なく町人と申すものはまさかの時の役には立たぬものなりと云へるに主人の答へて町人も人により候此利兵衛などは急度用にも立べき者なりとありしを利兵衛深く心に感激して其後元祿の變起りし時急ぎ赤穂へはせ下り大石に謁見していよ／＼籠城の企も候はゞ一方の固めに加り度と申出たり大石こゝにおゐて其節義を感じ終に密謀に及べるなりと又大石が機密を托するは

ど利兵衛を信せしは利兵衛嘗て赤穂へ下りし事ありしに折節夏のことにて寶器の虫干有りしかば利兵衛大石に乞ふて之を一見したり既にして一玉盃失せて見えす之を檢問するに利兵衛の外入るものなし衆人皆利兵衛を疑へり大石利兵衛を呼で之を語り且曰我固より子の竊まざるを知れり然れども子の外入たるものなし之を如何せん利兵衛曰僕實に之を竊めり請ふ速に刑に就んと時に有司既に潜かに之を侯に告ぐ侯袖の内より玉盃を取出して曰余取て玩ぶのみ利兵衛何ぞ知らんやと群疑忽ち釋けたり大石心に其人を奇とし變起るに及で大事を屬托せしなりと云

利兵衛の事其時代の正しき記録に見えず安永年間に至りて頼春水の天野屋利兵衛傳出たり故に水戸青山延子の四十七士傳疑を闕て載せず近世尾張の人國枝惟熙義人傳補正を著すに及び其事實を索め同國人某の

先世天滿屋曲全尾州の人天滿屋九兵衛と稱す茶技を千宗佐原叟に學び後恕心齋に學ぶ一流を立て曲全流と稱す寶曆十一年七月十四日七十餘歳にて没す嘗て京師に遊び松永土齋に出會せしことを載せて曰く曲全或家にて土齋に出會せし時談話たましく謠曲鼓の事に及びしが土齋もと鼓を打つこと巧にして曲全も亦之を好みしかば座中の人々皆すゝめて他日一席を開かんことを求め二人も喜びて承知せり既にして客退出せんとする時主人演技の日を定めんことを求むこゝに於て土齋愀然として曰某久しく鼓を打たず此約束あるをもてそと手を舉げて鼓を打つの形をなし試むるに拷問にかゝりたる爲め腕の働きの如くならずとも鼓を打つことかなはねば某をば見物人 内へ加へ玉へと乞ひしかば客皆涙を流して其事遂に止めりと此傳説ありと雖も國枝氏未だ確迹を得ざりしに偶京師の人ありて京師中立賣新町に天野彌三左衛門と云

者あり是れ利兵衛の同族にて今猶存せりと告げしかば國枝氏喜び其人を紹介として書を天野氏に寄せ春水の書ける傳をも添へて其事を質問せしに其實迹を得たりとて乃ち其答書を補註の追加として載せたり岡野の家に傳ふる所は春水の傳と大同にして其小異は利兵衛江戸に下り淺野侯の知を受けしは春水傳に無き所なり今一つ春水傳には利兵衛は放逐せられ其家資は悉く其子利右衛門に賜り續て總年寄を命せられしと有れども彌三左衛門が家に傳ふる所にては利兵衛は大阪三郷を逐はれ家屋敷家財は残らず沒收せられ天野屋の家こゝに至て亡ぶ利兵衛一子あり小三郎と云ふ滅家の後浪華小橋某の養子となりしが早世せりと云ふにあり又春水傳には京都北野瑞光院に利兵衛が寓居せしことあれども天野の返書には其事なく岡野村に閑居す近來まで土人天野屋敷と稱する舊地岡崎にありしが今は薩侯の邸となるとあり以上は信憑すべ

き説なり按に春水が天野屋利兵衛傳は大阪の人鹽屋伊兵衛と云へるが傳ふる所を以て著作ありしことは傳の附言及在津記事にて明かなり然るに世上赤穂精義内侍所といへる書ありて介石記を本として敷演したるものにて其内に天野屋の事を載せたり其記する所春水傳と異なる所は玉盃の事なきのみにて其他一に符節を合すが如し竊に疑ふ伊兵衛此書を傳へて著作を乞ひたるに非ずや内侍所の書體眞偽混淆して信ず可からざるものまゝあり

其著編の年月たしかに知る可からざれども利兵衛の事を書ける末文に「此事疑はしくば今大阪道修町の濱に天野屋九郎兵衛九兵衛の誤寫ならんか元祿末出板難波丸絲割符人の内道修町一丁目天野屋九兵衛とありといへる人あり是利兵衛が甥にあたり尋ねて疑をなすべからずとあれば元祿より二三十年の間を出でざるべし利兵衛の事を記せるは此書

を以て始めとすべきならんか此書中に利兵衛大阪三郷御拂ひ仰付られ家内役義は忰利右衛門に仰付られける其身は京都へ蟄居して禪門となり松永土齋と改名し北野瑞光院の地中に小家をしつらひ一僕を仕ひて居たりける云々とあり是春水傳と全く同じ利兵衛の家亡びし事は前にある京都天野より國枝に答へし書にて明なれども猶證とすべきは元祿の末より寶永の初頃に出板せし難波丸總年寄の項に天野屋の姓名見えざるにても其子に父の跡役を命せられざりしは明白なり又瑞光院に寓居の事も疑ふ可きは義臣傳を著はせし片島武矩と云へる人は享保四年義士十七年忌に當り京都に至り瑞光院主に面會せし事など記したるに其書中一も利兵衛の事を載せず若し院中に利兵衛住居せば必ず其人に接すべく假令面會せずとも瑞光院主は淺野家に縁故ある人なれば義士の事を記述せんとする人に對し利兵衛の如き義士に大關係あるものゝ

事を説話せざるの理なし然るに武矩何の記する所もなきは瑞光院中に
利兵衛の住居せざりしことを知るべし天野書に岡崎村に閑居すとある
は實説ならん

利兵衛住居地其他の事延寶七年刊行難波雀に左の如く見ゆ

松平伊豫守殿

三十萬石
備前岡山

藏本しあんばし濱天野屋利兵衛

細川越中守殿

五十四萬石
肥後熊本

名代しあんばし濱天野屋理兵衛

北組總年寄思案橋天野屋理兵衛

天野の返書に彌三左衛門景綱三子あり二男八右衛門大阪平野町に住す
池田侯藏本となる其子即ち利兵衛直之也とあり思案橋と平野町とは纒
かの隔りなれども地異りいづれを正とすべきか利と理二様に書けりこ
れも追考を要す

義人録補正に西京紙屋川椿寺に天野屋利兵衛の五輪塔あり題して法正

院空譽土齋居士享保十八年丑八月六日没行年七十三とあり惟熙按に其
縁起に傳ふる所頼千秋の撰と異同あり之を要するに好事者の偽造也と
あり

國分彌左衛門

彌左衛門は大阪の商人なり母と弟とありしが弟なるもの奸計にて兄の
家をとらんと思ひしかば母を欺て兄の非をあげて追失はん事を奉行所
に訟へに出けりさて彌左衛門召寄せられ母がまうす所おもひしれりや
まうす事あらば明すべしと有しかば彌左衛門まうすやう母がまうすと
ころ皆ことわりにてさむらふ某とても不孝せんとは願ひまうさずさむ
らへども性のつたなくしておのづからそむき申せし事の重疊して如斯
申立候上は申披くべき事も曾てなく候此は早く母が願ひみてさせ某を
如何なる罪にも處せられ候へとまたなく申けるに母涕泣袖に餘り女心

のはかなくてかく申は己が爲に罷成ぞと申につき弟にめでて訟申候兄の事に背かざる事は近隣の存たる所に候自らあさはかに申たる罪をば御許ありて本の如く兄をたておかせ給へ候べしとくどき申ける彌左衛門の母に背かす罪を負たる條左もあるべきながら神妙なりと稱美ありて弟が罪かるからざるに論きわまりて追放せられたり

堀田自諾

名は頼庸通稱佐五右衛門自諾は其號播州赤穂の人拳法起倒流の開祖にして天資剛正終身娶らず享保九年甲辰三月廿二日六十七歳にして没す墓は天満西寺町本傳寺にあり碑は文化十三年三月更に建る所にして堺上條公美撰文なり

大枝流芳

修然翁と號す其居に扁して青灣といふ大阪の人風流好事を以て世に聞

え殊に香道に名あり一號釣隱享保中の人雅游漫錄七卷貝盡浦の錦二卷青灣茶話及翫香の書數部を著す

福島萬兵衛

將碁の上手にして其名高し詰方指南の書を著す駒の小さきを用ひ萬兵衛駒といふ寶曆八年に六十七歳にて没せり

中島貫齋

大阪城同心名は長盛通稱太兵衛享保年間砲術の一派を開き中島流と號す寶曆十二年壬年正月五日没享年六十九墓は高津禪林寺にあり

中村白翁

名は遣達通稱嘉右衛門白翁又南鍼と號す京師の人相法を郭西に學ぶ郭西曰汝年三十を過るを得じとこゝに於て酒を斷ち食を節して心性を養ひ専ら其道を學び悉く蘊奥を究め遂に相法を以て聞ゆ四十八歳にして

浪華に遷る毎日三百五十人を相して終年虚日なかりしとぞ世稱して相家の中興といふ明和三年丙戌十一月廿三日没年六十四墓は下寺町良運院にあり

新山六足

名は退字は退甫六足翁又天橋窟主人と號す奥州仙臺の人郷を去て江戸京都に遊び最後浪華に住す相術に精し氣節を尙び武術を嗜む晩年専ら佛道に歸し名僧と交る其相法を説く尋常と異りと云安永四年乙未七月廿八日五十三歳にて没す墓は天王寺町天鷲寺にあり碑文は河子龍撰並書なり

森田士徳

河内若江郡荒本村矢倉氏の男通稱文藏寶曆七年森田氏の養子となる同十一年養家を嗣ぎ吹田屋六兵衛と稱す朝町に住せり初名茂政後に直政

と更む字は士徳懷玄堂又抱眞齋と號す森田氏世々子錢家にして諸侯邸に出入す士徳人となり洒落にして書生の如く浪華豪賈の間に行はるゝ一種の風習銅臭なし人の急に赴き窮を恤み毫も徳色を見さず趙陶齋の門に入て書を善し學を好み茶技を嗜み喜で名流と交を締び財貨を吝ます一日陶齋急用ありて金を借る士徳其數を倍して之に應ず陶齋歎じて曰人の金を貸す或は其數を減じて猶徳色あり士徳は之に異れりと當時頼春水大阪に在り年未だ壯ならず陶齋に従學す士徳之を資けて惟を下さしめ周旋頗る至り春水遂に名を成すに至る其交情の親密なるは春水が在津紀事に詳かなり士徳もと鑒識あり多く古書畫奇跡を愛藏し務めて其極佳なるものを撰み若し同手のものあれば其一を取り餘を捨つ茶器刀劍の如きも皆然り或年京師の僧來て藝州佛通寺の開祖愚中の書跡を賣るものあり士徳數十金を投じて之を購ひたりしに其後佛通寺に開

祖の書迹なきを聞て云く我に在ては玩具たり彼に在ては什寶たりと因て古金襴を用ひて改め表装し之を佛通寺に寄施せしかば一心大に喜べり其行大率斯の如し天明二年壬寅八月廿八日没年四十五生玉寺町法音寺に葬る

鐵屋鶴女

鶴女は浪華船場鐵屋吉左衛門の妻なり十四にして嫁し良人によく仕へ舅に孝なり十六歳の春一男子を産しが其年不幸にして良人吉左衛門病死す其忌もみちぬれば親族集ひて今男子ありと雖まだ當歳なり婿を撰みて鶴女に配せんとてしかくかたらひければ鶴女涙を流し吾若しといへども兩夫にまみへざるの教をきけりはた良人の忘れかたみに男子さへあれば我心の及ぶほどはあるじに代りて舅に仕へ此子をも養育せばやと語るに人々感じあへりかくて舅に仕ふること良人生存の日より

も厚く召つかふ者にも情深ければ皆其徳に伏しけりさて年もかはり一周のいとなみも過しかば先の人々去るものは日々に疎しといふ諺をや思ひけん又つごひて今はかく家事も整ひぬるものからまだ齡のわかければ行末覺束なし唯まげて吾々が言にしたがひ玉へといひけれど鶴女猶さきの如く誓ひていなみければせんすべなく止みぬかくしつゝ天明の年頃鶴不起の病にかゝり死に臨むころ人々枕邊によりて思ふことあらば残なくのたまひ置きねといふに更に言置べきことなし唯老人に先だつこと今生のうらみなれども是も命なればせんかたなし此上思ふことには死して後棺に收るまでは僧たりとも男子の手にふれしめ給ふな入棺の後は世の作法もあれば例にまかせられよといひ終て死す享年二十七歳とぞ

曾谷讀騷

名は之唯字は應聖俗稱仲介晩に字作と改む學川又讀騷居士九水漁人曼陀羅居の號あり京師の人片山北海の門に學び又篆刻を高芙蓉に學で名あり餘力蠻譯に慣ふ性直にして雅生産を事とせず寛政九年丁巳十月二十日没年六十墓は小橋天然寺にあり碑文は細合半齋撰並書也
著述

古印彙二十卷 印語纂二卷 印籍考一卷 漢篆千文補遺一卷
自刻印譜 詩文稿若干

麻田剛立 高橋作左衛門妻 間長涯

名は妥彰字は剛立以て通稱とす先事館と號す豊後杵築藩士綾部綱齋の第二子也幼より奇穎にして夜家人に負はれて出れば必ず仰で列宿を視て其名を問へり稍長じて甚星曆の學を好み又醫術を喜び困苦勉勵二十四年師受する所なくして大に其法に通せり明和の末藩主特に擢て侍臣

となし從て江戸に行く既に歸り歎じて曰星曆の學深遠豈に爵祿の累ありて能く究ることを得んやと依て仕を辭する事三度に及べども許されず遂に出亡して氏を改め大阪に隠る時に年三十八醫を業として益心を星曆に潜め年來涉獵する所を以て之を天に驗して合ざるあれば法の尙粗なるを知り悉く其書を捨て別に其術を索め専ら實驗を以て本と爲し或は器を執て露坐し或は筆を操て分疏し酷寒毒暑も倦避することなく夜枕に就かざること九年にして其術大成し是よりなほ思を凝すこと又十餘年に及び其實験する所合はざるなく人皆其精確に服せり其後外舶西洋曆法の書二種を載せ來り其說新奇密微天文家傳へて大寶とせり而して剛立が嘗て發明論著する所と符節を合するが如し衆益服す殊に消長求食の二法は今古に獨歩し西洋人と雖至る能はざる所なりと云剛立の名世上に高かりしより諸侯厚禮を以て招けども就ず幕府も之を召ん

と欲す應せず曰我吾が君を棄てしに非ず若し復仕へば舊君を捨て、いづれにゆかんやと寛政七年幕府曆法を改修せんとして星曆に妙通する者を索む執政夙に剛立の名を聞知ると雖も其齡の高きと仕官を肯せざるを知り門人高橋作左衛門間五郎兵衛の二人を召し曆政を改修せしむ測驗奇績あり舊天文方皆風靡す執政嘉賞し剛立へも賜品あり其名聲益隆なり剛立醫方の書に於ても包羅せざるなし之を人に施して或は其理ありて其功を獲ず或は其功を獲て其理を得ざるものあり歎じて曰其功を獲て其理を得ざるは我の不明なり其理を得て其功を獲ざるは豈眞に其理を得たる者ならんやこれも亦我の不明也この事あれば必この理あり我まさに深く究めて其理を竭さんと然れども星曆の研究急なるが爲めに未だ專攻するに暇あらず晩年星曆の業成るに及で曰我今は専ら醫を攻めんと大に論著する所あらんとして疾作り尋て没す人惜まざるな

し其没寛政十一巳年五月廿二日年六十六墓は口繩坂淨春寺にあり碑文は中井蕉園撰

高橋作左衛門名は至時東岡と號す大阪城同心也剛立の門に入て天學を究め其高足の弟子たり寛政七年幕府曆政を改修するにあたり同門間五郎兵衛と俱に江戸に召されて曆法を改正して功あり天文方に登庸せらる西曆管見曆算雜錄等を著す西人未發の説ありといふ伊能忠敬は此門より出づ作左衛門の妻亦賢女也作左衛門未だ浪華に在し時庭に大なる柿の木あり秋毎に其實を賣て若干のこがねを得しとぞ然るに其邊の若者ども夜にまぎれてぬすむ事數しらすその守にあるじいもやすからで夜もすがら見めぐりなどすある時番より歸りて見ればかの大木を根ぎはより伐りたふしてありこはいかなる事ぞと驚きあはてければ妻のいふやうわらはがきらせぬるなり何ゆえにさはせしぞとがめければさ

ん候ぬしは天學にて必家をおこさせ給ふべきさざし見え侍りされば夜毎に屋根にのぼり霄漢をうかひ深更に至りそのうへにかの樹の爲めに精神をついやし給ふはびんなきことなり此木あらずば本業專一にてよかるべしとおもひ侍るによりてりかくははからひしといひけるとぞ夫が天學にて幕府に召れし頃は既に此妻没せし後なりしといふ
間長涯名は重富字は大業通稱十一屋五郎兵衛長涯又耕雲主人と號す大阪の人世と質舗を業とす十二歳の時渾天儀を見て反復玩弄し居たりしが後數日手づから之を摸造するに原器と少しも異なる事なし弱冠に及び星家の學に志し麻田剛立に従學し遂に精微を究め互に發明する所あり寛政七年幕府改曆の擧あり高橋作左衛門と俱に召されて江戸に赴き其事に預る曆成て白金及廩食宅地を賜ひ苗字を稱し旅中非常に帶刀を許さる在府三年にして大阪に還る享和二年命を受けて長崎に赴き日食限を

查驗し又邊海の里程を測量す高橋作左衛門没するに及び復召れて江戸に赴き作左衛門が譯述して未だ功を終へざる西洋新法曆書を其子觀巢と共に續成すかくて江戸にあること六年暇を乞て暫く歸り幾もなく病に罹て没す時に文化十三年丙子三月廿四日年六十一也長涯爲人沈深智あり郷人處分し難き事あれば必來て諮詢するに長涯之を處する其當を得故に人皆之を尊重す平常技能の士を愛し嘗て小石玄俊と謀り資を給して傘工橋本宗吉を江戸に游學せしめ和蘭學術を修め成立に至らしむ長涯疾重く死に垂たるも敢て死を言はず其友竊に議して其癒ゆべからざるを告て命に安せしめんとす長涯之を漏れ聞き其子を召し告て曰數盡き身斃る何の惑かあらんたゞ諸友百方生を謀るに吾自死を決せば是れ諸友の厚意を無にするなり故に諸友の心を以て心として不死と云居れるなりと衆皆慚服す墓は茶白山邦福寺にあり

入江育齋

浪華の人なり生れつき穎悟にして性理の學を治め和歌は冷泉爲村卿に
學び茶は一燈宗室にうく其形長高く健強にして音聲高く凜々たる風骨
なり此人大に雷を恐るゝ癖あり夏になれば數多の書をあつめて雷鳴の
理を極むる時にあたり程遠くとも電光ひらめき雷一聲ひゞけばよろづ
の事打すて恐れおのゝぎ目をふさぎ耳を覆ひ顔も土の如し暫くは生た
る心地なし常に語て曰我八十の今に至るまで雷鳴の時は魂きへ耳目を
閉ぢ蚊張をたれて香をくゆらすより外妙術なしと雷の後よめる歌
吾にのみそらおそろしく見ゆるかな千里をわたる夕立の雲

今庄

今田屋庄太郎は浪華雜喉場の人にして父の代までは豪富なりしが庄太
郎の成長せし頃は家貧しくなりし故傭書して自給せりとぞ一時道頓堀

の網代屋といふ青樓に食客となり居たりしが常に游里に入こみ妓にな
じみて何ぞやりたく思へど何もなかりしがふと思ひ出して年頃秘藏せ
し蔣瑞光が金蓮といふ上品の墨古渡にて外に類なきものを遣れり或る
時都にのぼり島原の妓にふられし時

はかまくとことりまではいそのかみふりつゝ妹がさすとしてい
にし

平生物を買ふに價を直ぎるといふ事なく人に物くるゝに惜むことなし
一日天王寺邊に遊びしに往來の人あやまちて庄太郎の足を踏み之を謝
せしに庄太郎苦しからぬことなり拭て行かれよといふに其人是非なく
懷紙を出して足を拭てさりぬとぞ後に難波村に住て犬と狎とを愛して
多く養ひ若し死する時は厚く葬り法事をなしあたりの人に茶飯など送
れることたびゝなり中にも骸積と名づけし狎死したる時は殊に力を

落し追善の摺物などを配り奈良の法華寺へあつらへやりて狎のかたちを塑ねさせたり常に病者の風をなせしを以て人其名を呼ばずして病と異名せりとぞ

清野雁平

河内の人初めはいと貧しく浪華へ出て南地の青樓に食客となり客の肩をもみ妓の文づかひなどしてくらしがある時壁のこぼれ土油の中へ落たるを見て油を澄すことを工夫仕出し少しの元手に有つき米相場に掛りしにある夜富士の山を夢に見て賣りたりしが大に損をなせり其後又富士山を夢みて賣りしに又損をなせり三たび目に富士を夢みて又賣りしが今度は大分の利を得て次第に富有となれり或時方西園の山水の掛物を賈と知りつゝ買ひしをある人これはいかゞといひしに雁平されば成りあがりの雁平があほの似せ物をやすうても十兩にだまされたであ

らふと人のおもふは必定なりそれを表装の直打五兩で買て置けばそしられる五兩が客への馳走に又あとの五兩はほごこしとなればすこしも損はなきと答へしとぞ雁平の歌

富士の根とともに老せん契あれや髪に消せぬ雪をましつゝ

米熱齋

米熱齋は浪華の人放蕩にして大酒を好み家業をうしなひ諸國をうかれあるき美濃の岐阜に酒家多ければこらへかね遂に酒藏へはいり柄杓をとつておもふさま打呑折を見て出んとするに雪降出しければ又呑つゝとかくの事も忘れて沈酔となり正體なく柄杓を枕に熟睡して寐目覺て窓のもる日におどろき内を覗き見ればすこやかなる男二十人ばかり朝飯をくひ並び居たりされば出るに道なく此儘居ればあやうからんいかにと工夫をこらしやうく心をさだめ荒繩にて鉢卷し手ごろの棒をさ

がして腰にさし大勢の前を脇目もふらず眞一文字にゑいゑいとこゑを
はつし手を振て出ければ男ども肝をつぶし見て居るうち逃て吞逃も心
地よしと笑へりとぞ其歌

うかれてはまどふ野山の櫻にもさけさけとだにおもひくらしつ

百桂子

百桂子は浪華久太郎町の兩替商賣せし者なり十七歳のとき島の内笹風
呂の琴といふ妓をうけ出して老母に勘氣をうけ五百兩もちて家をしり
ぞき壘屋町に座敷を借り石印篆刻の招牌を出して面白く世をくらしあ
る時火吹竹なかりしに人をたのみて竹屋へ青竹三本買にやり大工一日
雇ひて火吹竹をきらせしといふおほかた金もつかひなくせし頃五十兩
附て妓を京の親元へかへし殘金五十兩ばかりのうち五兩とりのけおき
旅の路費とし餘金を以て暇乞の芝居を催して旅に赴きぬ後に勘當ゆり

て家にかへりしが常に芝居を樂とせしとぞ

其の詠歌

詠つゝ酒のむほどはうきごとともまたしら雲の山櫻かな

木村異齋

名は孔恭字は世肅通稱坪井屋吉右衛門大阪の人造酒を業として堀江に
住す嘗て井を堀る數尋にして古蘆根を獲たり喜で曰此豈古の浪華の蘆
ならんかと因て其堂を名けて兼葭と云ひ當時の名家に詩若くは文を求
め殆ど萬首に及べり異齋博學多藝書畫及詩を善くし最物産の學に精し
多く珍籍古圖畫金石器物書帖を儲ふ性の篤愛する所なり故に四方好事
の士羨慕來訪する者斷へず交道大に廣く兼葭堂の名海内知らざる者な
し中頃事に坐して籍没の厄に罹り家産蕩盡頼春水師友志に異齋の造酒
株を他人に貸置しに其者造石高の禁を犯して籍没せられしが其株の名

は巽齋なるを以て免る事を得ざりしなりと云へり勢州長島城主増山氏
(名正賢號雪齋)は年來知遇を受けたるを以て家を携て長島に客居し其厚
情を得同床に臥し同机に語る後大阪に歸り伏見町に住み文房具を鬻ぎ
て業となす嘗て長崎に遊びし時細かに清國の風俗を視察す歸後黃蘗山
の大成禪師に隨ひ遊ぶ禪師は清人なり若し人支那の風俗を問ふものあ
れば曰吾に問はんよりは兼葭に問へと故に世人巽齋を以て唐山様風流
の祖と爲せり江戸東叡山の麓に井上貫流といふ人ありその面貌甚だ奇
なりされども世人多くは知らず兼葭はやくも之を聞知り其隣人にたよ
りて貫流が肖像を求む貫流之を聞て大に悦び自ら畫家を備ひて肖像を
畫かしめて贈れりと又江戸の筆商鳳池堂のあるじ浪華に遊びし頃兼葭
堂を訪ひしにしばし待たせ給はれ其中の慰めにとて一帖を出せりいか
なるものと聞きみるに江戸の筆工の家號をしるしたる名紙といふもの

を一枚の遺漏なく集めありしとぞこれらを以て好事の一端を想ふべし
巽齋嘗て江戸に赴く道すがらに奇石を拾ひ取て一の行李と爲せしを之
を擔へる人足誤て路銀と思ひしや持逃をなしたるが開き見て路に棄て
たりければ再び巽齋の手に返りしとぞ巽齋は一妻一妾一女子あり一家
和睦善く主人に事へ巽齋客に對すれば妻妾其側を去らず皆能く事を解
し書畫器玩主人の願使に隨て辨せり巽齋享和二年壬戌正月廿五日沒年
六十七小橋寺町大應寺に葬る碑文は長島侯の撰并書なり養子孔陽字は
世輝石居通稱木村吉右衛門家を嗣ぐ畫梅煎茶を善せり巽齋沒後官より
命じて遺貯の書籍を納めしめ給するに金五百兩を以てす其書奇帙僻書
皆尋常のものにあらず又其藏弄品の世上に散在するもの人争ひ求めて
之を珍重せり

巽齋著述

弇山園記註 銅器由來記 沈氏畫塵註 巽齋印譜

兼葭堂書目 海外佚書目 巽齋詩艸 藝苑贅言

溫泉紀述

巽齋の後裔今駿河静岡に住し木村吉右衛門と稱し造酒を業とす其所藏巽齋親筆の遺書の寫を得て全文を載す前に記する所と重複するものあれども巽齋一生の經歷概見すべし

兼葭書遺書の寫

余幼年より生質軟弱にあり保育を專とす家君余を憐て艸木花樹を植る事を許す親族に藥舗のものありて物産の學ある事を話し稻若水(物産家中興名宣義)松岡玄達(字成章號恕庵平安人以物産學繼若水而興ある事を聞けり十二三歳の比京師に松岡門人津島恒之進(名久成字桂庵號彭水又如蘭軒受業松岡先生越中高岡人法橋

津島玄俊の弟松岡學頭たり)物産に委しき事を知りこの頃家君の京遊に従ひ始めて津島先生に謁し草木の事を問ふ事一會翌年余十五歳家君の喪にあひ十六歳の春家母に従ひて京に入再津島氏に従學し門人となる事を得たり之より屢書を通し物産の説を聞き津島氏も毎歳浪華に下り本艸の會あり數出會す寶曆四年甲戌津島氏客中に卒す同社戸田齋(號旭山備前人)江戸田村元雄(坂上登號藍水)平安直海(元周名龍越中人)など書を通し考索を事とす近き頃平安蘭山(小野希博字以文)に従て益名物の事を究む齋藤彦哲も親く交る事を得たり

余五六歳の頃より頗る畫事を解し我郷の大岡春卜狩野流の畫に名あり因て從て學ぶ春卜嘗て芥子園畫本に倣ひ明人の畫を摸寫し明朝紫硯と云彩色の繪本を上木す余これを見て始て唐畫の望

あり頃家君の友人の家に和州郡山柳澤權太夫(郡山公族始名下野名柳里恭字公美號淇園畿内の雅伯なり南郭集に郡柳大夫と云これなり)毎々客居す因て友人に托し柳澤の畫を學ぶ然ども郡山に從學する事を得ず粉本を學べり十二歳の比長崎の僧鶴亭と云人あり浪華に客居す長崎神代甚左衛門(熊斐字淇膽號繡江沈南蘋の門人なり)の門人なり始て畿内に南蘋流の弘たるは此人より始めり(名淨博字惠達號鶴亭今改名淨光字海眼黃檗寺中紫雲院住職なり)余隨て花鳥を學び京に入り池野秋平(池戴成字無名號九霞號大雅堂平安人)に從て山水を學ぶこの頃交友甚多し
余十一歳の比親族兒玉氏片山中藏(片猷字孝秩號北海越後新潟人)宇明霞先生(門人)の門人たるを以て余を引て名字を乞ふ片山余に命名し名鶴字千里とす其後片山氏京に住す余十八九歳の頃片山

氏再び浪華に下り立賣堀に住す余從て句讀を受く四書六經史漢文選等を讀む事を得たり此後數々京に遊びて片山氏同門梅莊禪師(顯常字大典慈雲庵の長老なり)相國寺に謁し岡太仲、谷左冲、伊藤惣次、清田文興、江村傳藏、良野平助、篠三彌、林周助、芥川陽軒、龍彦次郎、山脇香川後藤の先輩に交る事を得たり

余嗜好の事専ら奇書にあり名物多識の學其他書畫碑帖の事余微力といへども數年來百費を省き收る所書籍に不足なし過分と云ぶし其外收藏のもの

本邦唐山金石碑本 本邦古人書畫 近代儒家文人詩文 唐山
人眞蹟書畫 本邦諸國地圖 唐山蠻方地圖 艸木金石珠玉蟲
魚介鳥獸 古錢 古器物 唐山器具(奇を愛するに非ず専ら考
索の用とす) 蠻方異産

右の類ありといへどもみな考索の用とす他の艶飾の比にあらず
 余平生茶を好み酒を用ひず烹茶は京師の賣茶翁親友たり故に其烹法を
 用ゆ老翁の茶具余が家にあり抹茶も好で喫す彼の茶禮の暇なし
 余幼年より絶て知ざる事 古樂管絃 猿樂俗謠 棋碁 諸勝負 妓館
 聲色の游總て其趣を得ず况少年より好事多端暇なき故なり勝負を好ま
 ざるば余願養の意なればなり
 余弱冠より壯歳の比まで詩文を精究す應酬の多に因て贈答に勞倦し况
 才拙にて敏捷なる事あたはず大に我が胸懷に快ならず交誼に親疎あり
 障あるを覺ふ幸不才に托し限て作爲せず偶興の到るにあへば佳句を得
 て快樂の事とす

寶曆六年丙子余廿一歳森氏を娶る生質微弱にして余が多病を給するに
 堪へず况十年を歴といへども一子を産せず故に家母甚だこれを愁ひ明

和二年乙酉家人に命じ一妾中山氏を娶り給仕せしむ妻森氏と好和にて
 嫉忌のことなし中山氏も侍婢となり敢て當夕の事にあらず三年を歴て
 妻森氏明和五年戊子冬一女子を産す(幼名やす安永三年甲午六歳痘夭)又
 明和八年辛卯一女子を産す(幼名すゑ無恙生長す)妾山中氏よく妻の微質
 を助け二女を憐愛す故に妻妾友更和好にして嫌惡の事なし家事を勤儉
 し小女を養育し數十年の閑居にて余と小女妻妾の外一小婢を仕ふ家内
 五名の外なし故に來賓多しといへども禮節饗應をなす事かたし
 世上各本分士農工商ありといへども余微質多病にしてこれに堪へず故
 に父母の遺業にて頗る文字を知る實に昇平の一樂なるべし然ども世上
 游惰放蕩の徒文字に托し一種の無頼漢多し余が愧る所なり因て閑居す
 といへども名物の學を精研し不朽の微志あるのみ余家君の餘資に因て
 毎歳受用する所三十金に過ぎず其他親友の相憐を得るが爲少く文雅に

耽る事を得たり百事儉省にあらずんば今日の業を成さんや世人余が實を知らず豪家の徒に比す余が本意にあらず

水野尾正珉

名は尨字は眉公姓赤松漁石子と號す正珉を以て行はる大阪の人醫を善し書詩皆巧なり篆刻を葛子琴に學び其技高芙蓉子琴と美を駢ぶれども人之を知るなし産業を事とせず其堀江に在し日近鄰失火す赤松高洲往て救ふ正珉の家水に臨めり正珉盃を舉げ其焼けるを指示して曰雲烟吞吐龍の天に登るが如しよき肴にあらずやと家具の取片付をもなさとりしとぞ後奈良に徙り五十二歳にて没す

前川虚舟

名は利涉大阪の人善く細字を刻せり嘗て一寸方の石に獨樂園記を刻し末に年月日姓名印記皆そなはる又蘭亭帖を摹刻す豎一寸六七分横七八

分其字畫疎密肥瘦原刻と異なることなく前に米芾の印あり後に緝熙殿寶

記あり

古今縮本未だ此刻の如く縮めたるものなし後又後赤壁賦を刻す亦一寸方の石なり頼春水歎じて曰無雙の絶技な、唯世之を觀るの目なきを惜むのみと

北山七僧

名は皓字は白甫七僧居士又桃庵と號す通稱正藏河内の人北山壽庵が姪なり江戸に游學し後大阪過書船の吏たり好事を以て名を知られ高芙蓉池大雅の諸名流と交游す人七僧の號あるを以て正藏の稱あるを知らず多く古墨帖を藏す當時市上往々墨帖に七僧圖書記印あるものを賣買するあり七僧の友人其貧困して之を鬻げるかを疑ひて七僧を詰る七僧曰これ皆近日書賈來り售んとせしものにして余必印して返せるなり何と

なれば余が印記あれば價を増すと云へりと友人大に笑へり七僧文化三年丙寅五月十一日没年八十六墓は天王寺南門外超願寺にあり詞擅鷄鳴集、定武樓文集を著す其春臺墓に謁する詩

君去歸何處、紫芝空有園、一邱埋傲骨、片碣拜師恩、舊事堪追憶、新編誰復論、空留千載業、猶自壓中原、

二好雪女

雪女は浪華の豪商某が妾腹の子なり幼より長堀茂左衛門町の藥舗木津屋五郎兵衛の養女となる木津屋氏は三好これも豪商なり其十六七歳の時婿を迎へんとせしに其人の柔弱なるを嫌ふて聽かずこれより誓ふて夫を迎へず當時世上にて雪まことに男を嫌ふに非ず實は我思ふ男に添はれぬ故なりと云ひしとぞ生れつき俠氣あり色白く肥て力強く書畫を柳澤淇園に學び又擊劍拳法を好みて皆これを善くせり其市中を往來す

るに顔に墨を塗り其上に白粉を施し異様のかたちに出たちてありきしとなり故に其恙一日は頬にあり一日は額にありて定まらず又常に二婢を従へり一人を龜一人を岩と云雪十六歳の時二女は猶幼年なりしが無頼の少年途中にて之を挑み戯れしに雪二女に目くばせして打伏せしめ起つこと能はざるに至る其頃天王寺村口繩坂邊は人家まばらにて日中にも人通り稀なりしが雪獨身にてこゝを通りかゝりしに二人の掬兒立出で雪が身のまはりのものを奪ひ取らんとせしに忽ち二人の賊を打倒して過ぎ行きけりこれらの事よりして世の人皆目をつけやつこ奴といふて恐れたり奴とは當時俠者を呼ぶの稱なり因て延享五年正月道頓堀豊竹座の操芝居にて客競出入湊といふ狂言に奴小萬といふ俠女子を取組しは實に雪の事なりされども其名をあらはにするを憚り小萬とせしは雪の母の名を萬といへるより作り設けしなりと其後京都堂上家の

家臣浪人して大阪にありしを扶持して之を愛し難波新地の邊に住はせ置たりしに此男非義の行ありしかば雪怒て忽ち放逐せり(一書に此男を以て強盜日本左衛門本名濱島庄兵衛とすれども確なる據あらず庄兵衛は延享三年の冬京都町奉行所へ自首翌四年三月江戸にて斬られ其犯罪地なる遠州見付宿にて梟首となりしにて雪が十九歳の時なり又柳里恭の妾たりし説あれども誤なりといへり異常の人にて兎角附會の訛傳多し)これより男になれず嘗て淇園の囑を受けて惡黨を捕へし事もありしと或時禁中の事を知らんと欲しもとより書をよくするを以て長橋局の書記となる事五年にして頗る宮庭の故實を諳じたり其後薙髮して天王寺村月江寺に寄宿し法名を正慶と云へり三好氏の系は長慶より出ると云ふによれりと又母の紋菊水なるを以て平日の衣服皆此紋を用ひて楠公の苗裔なりと唱へしが薙髮の後には白色の法衣を着てなほかの二婢を

相手にして游戲せり後には木津村に徙りしが家を持っては人の往來煩はしとしてその家を木津の菩提所に寄附し難波村の人の家に寓居すれども其居所を定めず一棺を買て死後の豫備とせり文化三年丙寅五月二日出て路上に頓死す時に年七十八正慶を知るもの争て之を來り告げ豫備の棺に納めて葬る頼山陽が阿雪傳に幽泉寺に埋め墓石雪及龜と嵩との状を彫れりとあれども木津難波に幽泉寺なし木津村眞宗唯專寺帳簿に大和屋庄兵衛同家木津屋正慶とあるもの是なるべし然れども墓は見えずいつの頃にか難波瑞龍寺開帳の時俄に雨降出し參詣の群集雨具の備へなくていと難儀のをりから正慶見るに忍びずとて傘百本を半面の識なき老若へ與へしとぞ又月江寺にて大法會を爲し伶人を招き樂を奏し盛に供養を爲せしかば人其故を問ひしに關白秀次が二百年忌を爲すと云へり又竊に金を京師方廣寺に寄附して吾が爲めに豊臣太閤を吊へと云

しとぞすべての行狀此の如し享和二年壬戌江戸の曲亭馬琴大阪に來りし時親しく正慶に逢たる事を其羈旅漫錄に記せり其中正慶云へらく老婆が忌嫌ふ所のものは酒客と猫なりとあり然れば山陽が傳に日に客を會し酒を飲とあるは誤れるか或は老壯嗜好を變せしならんか又漫錄に木村異齋嘗て正慶の畫に自ら題辭せる墨を造らしめしが兼葭堂形の墨とて今猶存せりと記せり馬琴の望によりて正慶が書ける自作の詩及發句

早春

金城春色映丹霞活氣和風到萬家潰笑宴然樓上興捲簾先見園中花

(字句誤あるを覺ふ姑く原本に従ふ)

月落ちて松風さむき野寺かな

淡太郎

通稱淡路屋太郎兵衛浪華島の内白銀町に住す四天王寺再建世話方の棟梁にして世に名高し天王寺西門脇廻廓の内に木像を安す紙屑屋を業とせりと云へり文化十年癸酉十一月三十日没年五十四高津正法寺に葬る

眞瀨中洲

名は達夫字は發貴俗稱彦右衛門尾州の人易學に名あり占筮の妙神の如しと其頃云ひはやせりと著す所易學の書種々あり文化十四年丁丑二月二日没年六十四墓は北野寒山寺にあり

水谷雄琴

名は君龍字は起雲正介と稱す備中の人大阪に住し易説を以て教授す兼て占筮にも頗る奇驗の聞えあり文化の初に没す著述

周易折衷要削 周易術 周易取象徴 周易正字考 定本洛書新説

全國字説 非易學啓蒙 易占通 易占的 歷代占例考

中華龜卜考 日本龜卜考

山片蟠桃

名は芳秀字は子蘭初名有躬字子厚後今の名に改む通稱舛屋小右衛門播州加古川の人也少より大阪に出で子錢家舛屋平右衛門の家に仕ふ英邁にして智あり學を好み業を中井竹山に受け旁ら麻田剛立に従て天學を學び又蘭學を喜ぶ當時博學を以て聞ゆ常に喜で經濟を談す身主家の事を管するに及で益諸藩國へ廣く貸出し諸侯に寵あり竹山及弟履軒常に蟠桃の識量あるを稱す故に中井門皆目して孔明と云へり其語に曰天下の憂に先ちて憂ひ天下の樂に後れて樂むは是君に事へ事に處するの節操以て自ら任ずる所なり學で厭はず人を誨て倦ざるは是已を修め人を治むるの要終身以て自ら勤る所なり詐を逆へず不信を憶ばからずして抑亦先づ覺る者これ賢なるか是れ人に接するの機密心鏡以て自ら磨く

所右三言終身一日も忘る可らず拳々服膺死して後己む可し故に識して以て自ら警むと家業少暇あれば群籍を博讀し義理を研究して措かず或年の夏晝寢を絶て夢の代十餘卷を著す天文地理食貨經濟より神代鬼神等の事に至り明辨詳論尋常に超越せり竹山兄弟其見解を稱す桑名老侯松本樂翁もと蟠桃の人と爲りを嘉せしが夢の代を讀むに及で益之を奇とせり當時阪人市中の人物を評するに必蟠桃を以て第一流と爲せりと云文政四年七十四歳にして没す子芳達小右衛門と襲稱す學を好み父の風ありと云

大藏永常

通稱徳兵衛大阪本町古手屋上田某方に寄寓せし人にて殖産の事に志深く豊稼録除蝗録及廣益國産考十卷を著す文化文政間の人

谷川龍山

俗稱順助浪華天滿の人易學を眞勢中州に學びて名あり著述の書周易本筮指南、圓著筮法指南、左國易一家言、易學階梯附言、此餘尙多しと云天保二年辛卯十二月四日没年五十八東天滿寶緣寺に葬る

水野南北

相學に名あり著述の書南北相法、同後篇、相法修身錄あり天保五年甲午十一月十一日没年七十八天滿東寺町法輪寺に葬る

松岡良助

大阪城同心にして算術の達人なり算術稽古大全を著す年代不詳

松井羅州

名は暉星字は資黃浪華の人易學を以て名あり年代不詳

僧無相

大阪の人磨光韻光を著す尙著述數種ありと年代未詳

小島彤山

名は旭字は子産丹後峰山の人幼より彫刻に巧なり師承する所なくして製作超凡細勁緻密人皆其妙を賞せり平生京都を愛し遂に家事を弟に讓て京に寓居す初め丹山と號せしが京に入るの初峯山城主の命を受けて象牙の印鈕に百種の花鳥を刻せしこと天聽に達し御覽あるべきとの事なりしに凡て天覽に供するものは其作者の姓名居所を録して奉るの例なるが丹の字城主に對して憚り避けざるを得ず依て之を詔命を傳へし藤原長親卿に諮ふ卿曰改めて彤に作る可なり古へ丹後丹波を彤後彤波に作れる例ありと是より號を彤山と更む長親天所視の三字を書して賜ひ之を寵榮せり彤山嘗て象牙の根付に盧生が夢の圖を鐫れり其徑纔に一寸餘の内に十五の樓閣八百八十の人十二の馬象あり禽鳥は數へ盡す可からず見すれば蟻の巢實に集るが如きも顯微鏡を以て視れば先づ

盧生が榻上に睡れるあり其眉髪までも鮮かに見へ枕邊には迎への人馬行列し蓋憧を建て輿を昇き樂を奏するあり門外には百官拜迎するあり後ろの方には宮殿樓閣重なり最後の大殿には幄を設け盧生を坐らせ衆人珍玩を捧るあり伶人は蘭陵王を舞ひ袖を奮ひ足をあげ笛笙箏篋鉦羯鼓の役々皆そろひ其舞を観るもの五十餘人其他の細密なる事は頼山陽が象墜記に詳かなり實に絶世の技術なりと此時形山年僅かに二十歳なり後又一の谷合戦圖の根付を製すこれ亦極めて巧緻なり然れども平生多く作らず興到れば刀を執り寢食を忘るゝことあり喜で硯を製し漢製の佳妙なるものを見れば之を摸造して真に迫れり性書畫古玩器を嗜み頗る賞鑒に精し又琵琶を能くして暇あれば撫彈して自ら樂めり濶達にして氣概あり一時の名流と交る天保年間大阪に徙り弘化二年乙巳七月十六日五十二歳にして没す墓は高津禪林寺にあり

僧 眞 阿

浪華の人本田氏の男九歳にして出家し十五歳にして江戸増上寺に赴き後執法職となり方丈殿舎の再營に盡力して功あり故あり去て諸國を歴游して數寺に止錫す晩年坂松山一心寺に住し大に土木の功を興し殿堂を壯麗にす又四天王寺勝尾山其他諸寺の請に應じて土木の資を勸進し廢を興し荒を新にする事數回皆能く其功を奏せり近世一心寺の中興大徳と稱せり其平生一單衣一布袍の外儲ふる所なく嘉永三年庚戌十一月二十五日没年七十一墓は一心寺にあり墓上一個の天然石を置きたるのみにて碑を建てず

福田 金塘

名は復字は徳本金塘又貫通齋と號す父太兵衛美濃の人壯年大阪に出で商と爲り二男あり長は則ち金塘なり少より學を好み特に算數を攻む既

にして父母に従て郷に歸り居る事三年歎じて曰く商となり農となるは我志に非ず大丈夫の業若し爲る事能はずんば道に隠れんのみと父母に乞て再び大阪に出で専ら天象曆數の學を修め諸國を行游して益其道を研精し塾を開て子弟を教導し我國先輩の傳西洋支那名家の說を推究涉獵し弟理軒と共に其議論を上下して之を折衷し一家學を爲す從游者數千名を爲す者多し著書若干皆世に行はる土御門家之を嘉して名を美濃正とし師範代を命ず安政五年戊午七月九日没年五十二墓は小橋傳光寺にあり

五十川金雪

名は正緒通稱平野七五郎初め長堀に住し後中の島に移る詩書を善くし酒を好み物に拘はらず常に文人畫家に交り風流に游べり或る時友人と北山邊に游ばんと約せしが其日に至て友人旅裝を調へ大江橋邊より人

を遣て金雪を促すに猶寢所に在りとの事に友人等あきれ居る中金雪出來れり人々其早きを恠みて見れば脚絆の片方は倒に着け居たり打笑ひ行く程に北中島の茶居の前にて金雪諸君一足先へ進み玉へやがて追付べしとて内に入りぬ友人等先に進み途中にて屢立止りて待てども久しく出で來らざるを以て一人茶店まで立歸りて見れば金雪床几に腰かけ酒を命じ飯を食ひゆうくたる有さまにて未だ朝飯を食はざれば足はこび苦しくと云へり

又或日金雪島下郡才寺邨の知れる人の方を始めて訪しがある家に入り上り鼻に腰打懸けて草鞋を解きながら早く洗足の水を持ってと云ふに家人君は何人にて何れへ行き玉ふやと問ふ金雪某方へ行なりと其人笑ひてそれは同姓なれども此方にあらず其家はかくくせる處なりと金雪驚きあはて過を謝して立出たり又嘗て兩三名打つれ心齋橋筋を通りし

に金雪突然一書肆に入れり同行の人思へらく書を買ふが爲ならんと少
しく先へ行き待てども來らず立戻りて尋るに主婦店に在り顔色をかへ
て曰さては其方さまには今の人の御つれなるや今の人は一向に見知ら
ぬ方なるに突然入りて奥へ通り雪隠へ行かれたり無禮も甚しと友人驚
きて頻にわび入り居れるうち金雪雪隠より出來りて失禮と言たるまゝ
何の言葉もなく表の方へ飛出したり友人も詮方なくねんごろに詫びて
迹を追かけたり是等の奇話はしばゝありしとぞ

文久元年辛酉三月三日五十三歳にて没す墓は下寺町大蓮寺にあり

浪華人物誌卷三終

